

# 算命学中庸

## 【初年】 39 回目

39 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【旺相休囚死法】

・【初年】 39 回目 【旺相休囚死法】 01

### □ 旺相休囚死法 (おうそうきゅうしゅうしほう)

38 回目の授業は、陰占『人物の場所』でした。

「年干」は父親の場所、(日支)は配偶者の場所というように、  
陰占宿命における場所の説明がありました。

ここから 39 回目 【旺相休囚死法】 **第 1 章** の授業です。

この技法は、家族のチカラ関係をみます。

## 【旺相休囚死法】 第 1 章

人物をつかった占いの技法は、算命学にはいくつもあります。その技法の 1 つがおうそうきゅうしゅうしほう旺相休囚死法です。

いちかぞくない一家族内のチカラ関係（ちからの強弱）をみます。

「おう旺」「そう相」「きゅう休」「しゅう囚」「し死」順位は 5 段階あります。

〔たとえば〕 A 妻のつま宿命をみると『一家のなかで母親である A 妻は弱いけど、その夫はもっと弱くて、長女が 1 番強い』というように観ることができます。

家族のなかで誰が強くて、誰が弱いのかを観るわけですね。一家のなかにおける〔権力と申しますか……〕〔発言権と申しますか……〕そのようなチカラ関係の順位をみていくのが「旺相休囚死法」です。

この技法をつかいますと〔たとえば〕結婚するお 2 人の宿命をみたときに〔この人は亭主関白になる……〕とか〔この女性は結婚すると、夫よりも強くなる……〕とかあるいは、お子さんがいる家族全体をみたときに、家族のなかで子供が 1 番強いので〔子供に振り舞わされるようになってしまう……〕とか、その姿はさまざまです。

∞ 強弱は5段階あります。

まずは各人の宿命をだすことから始まります。

宿命は父親が『旺』になっているとか、母親が『休 3 番目』になっているとか、自分が『死 5 番目』になっているとかの強さをみていきます。

『旺』が1番強くて、『相』は2番目の強さです。

『囚』は4番目の強さです。『死』が1番弱い強さです。

『死』といっても“死ぬ”という意味ではありません。

〔家庭内におけるチカラが1番弱い〕という意味です。

ただし、強弱を見るときには、1つ大事なことがあります。

社会生活のなかでも、あの人はすごく強いとか、あの人は弱いとか、そういう言い方をすることもありますよね。

〔たとえば〕有名人で強い人を挙げてみますと、他界した安部晋三さんは、総理大臣でしたから、権力が1番強かったわけです。

この人の権力は強いので『強い』とします。

安部晋三 … 強い

テレビを観ないので、その姿を深く知らないのですが、インターネットには、彼女の強い感じがでています。

和田アキ子 … 強い

その例はなんでもよいのですが、安部さんは総理大臣で強くて、和田アキ子さんも強いとしたら、阿部総理大臣と和田アキ子さんでは、どっちが強いのか……と訊かれたら、どちらが強いでしょう。

一方は政治家、一方は歌手・タレントです。

これは分野・土俵が違いますから、どっちが強いとは言いきれませんが、そこに『権力』という言葉を加えればハッキリ判ります。

つまり、総理大臣とタレントです。

☞ [例え] を換えます。

スポーツ界のほうが、わかりやすいでしょう。

相撲の世界では、白鳳は強い横綱でした。(現役を引退)

1 番強い力士 … 白鳳

☞ 野球で考えます。

野球の歴代では、日本人ではイチローなのだそうです。  
大リーグ新記録をいくつも打ち立てて、すごく強い打者  
とのことです。(間違っていたら、ご教授ください)

野球 … イチロー

白鳳とイチローでは、どっちが強いかというと、一方は  
相撲、一方は野球選手

白鳳 (相撲)

イチロー (野球)

相撲と野球なので、これも分野が違いますから、どっち  
が強いのか、それは原則としては比較できないはずです。

分野が違うので比較できない。

2人で相撲を取れば、当然白鳳が強いでしょうが、2人  
が野球のバッターとして戦ったら、イチローの方が断然  
強いはずです。分野違うので比較できないのです。

おなじ分野であれば、比較できるのかどうか考えます。

〔たとえば〕 イチローさんと王貞治さん

イチロー

おうさだはる  
王貞治

どちらも野球選手です。どっちが強い選手でしょうか？

どっちが選手として上位でしょうか？

おなじ野球の世界ですが、活躍した時代が違います。

比較できないはずです。

時代が違うので比較できない。

イチローさんの時代と、王さんが活躍した時代とでは、バットの材質からして違います。

スパイクの作りと材質も、グラウンドの整備状況も、戦う選手達のレベルも全然違うわけです。

そうであるのに、そのような<sup>くら</sup>比<sup>ごと</sup>べ<sup>くち</sup>事を口にしますよね。

〔坂本龍馬が生きていたらとか——〕

昔の記録と、昨今の記録とでは、時代背景が全く違いますから、比較対象に本当はならないはずですよ。

皆様はいかがおもいますか？

相撲にしても、戦前・横綱<sup>ふたばやま</sup>双葉山が 60 何連勝しました。  
とかいいますが、戦前の 60 何連勝と<sup>いま</sup>現在の 20 連勝とでは、どちらのほうが“価値が高い”それは比較できないはずです。

昔と現在では、からだの大きさも違います。

時代背景が違ってしまえば、比較できないはずです。

オリンピックなどでも〔世界新記録だとか〕〔記録は破れませんでしたとか〕アナウンスを耳にしますが、何年か前の記録と現在の記録を、そのまま比較するのはいかなものでしょう……とはいっても、競技ですから、比較することで、視聴者を刺激しているのでしょう。

実際には競技場が違いますし、そのときの風向きとか、競技者の環境・サポートなどのすべてが違います。

昨今の競技場は、記録が出やすいように、グラウンドを整備しているとのこと。

厳密に言えば、単に記録だけで比較すること自体おかしいと考える人もおられるでしょう。

そうしますと、分野が違っても比較できません。

時代が違っても比較できないわけです。

そうであるなら、分野も基準を決めて、時代もきちんと基準を決めて……〔たとえば〕野球であれば、どちらが打率を残せたかと比べるのであれば、それは比較できるでしょう。

まったく同時代に、おなじ大リーグで活躍して、どちらの選手がたくさん打ったのかということであれば、それは結果がでますので比較できるはずです。

しかし、<sup>いま</sup>現在の世代の競技者と、昔の競技者との比較はできないはずです。

皆様……いかががお考えになりますでしょうか。

☞ 「十干」<sup>じっかん</sup> と (十二支)<sup>じゅうにし</sup> の勉強をしたときに……。

「十干」 —— <sup>くうかん</sup> 空間 「五行を陰陽に分けたもの」

(十二支) —— <sup>じかん</sup> 時間 (1年を十二区分したもの)

「十干は空間」(十二支は時間)をあらわすということでした。

分野は「空間」をあらわします。

空間が違うので比較できない。

時代は(時間を)あらわします。

時間が違うので比較できない。

強弱を語るには「空間」と(時間)がともに必要である。



算命学の原則

「自然界は空間と時間で成立っている」と書かれていました。

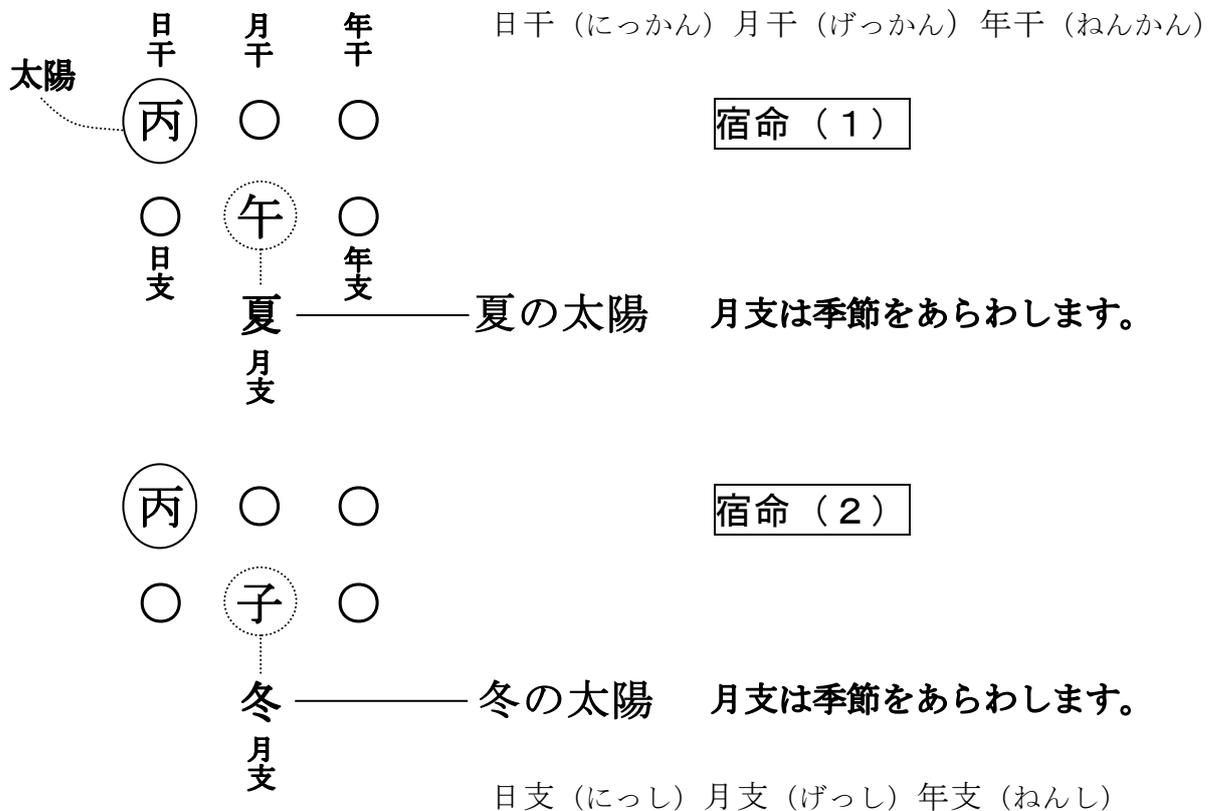
強弱を語るには、空間が欠けても語れません。

時間が欠けても語れません。両方ともきちんとした基準がなければ「強い・弱い」を語ることはできないのです。

⇒ 算命学では「丙火」を『太陽』にたとえます。

その「丙火は強いですか?」「弱いですか?」と訊かれても「丙火」だけでは、強弱を語ることはできないのです。

そこで命式をつくって具体的に考えます。

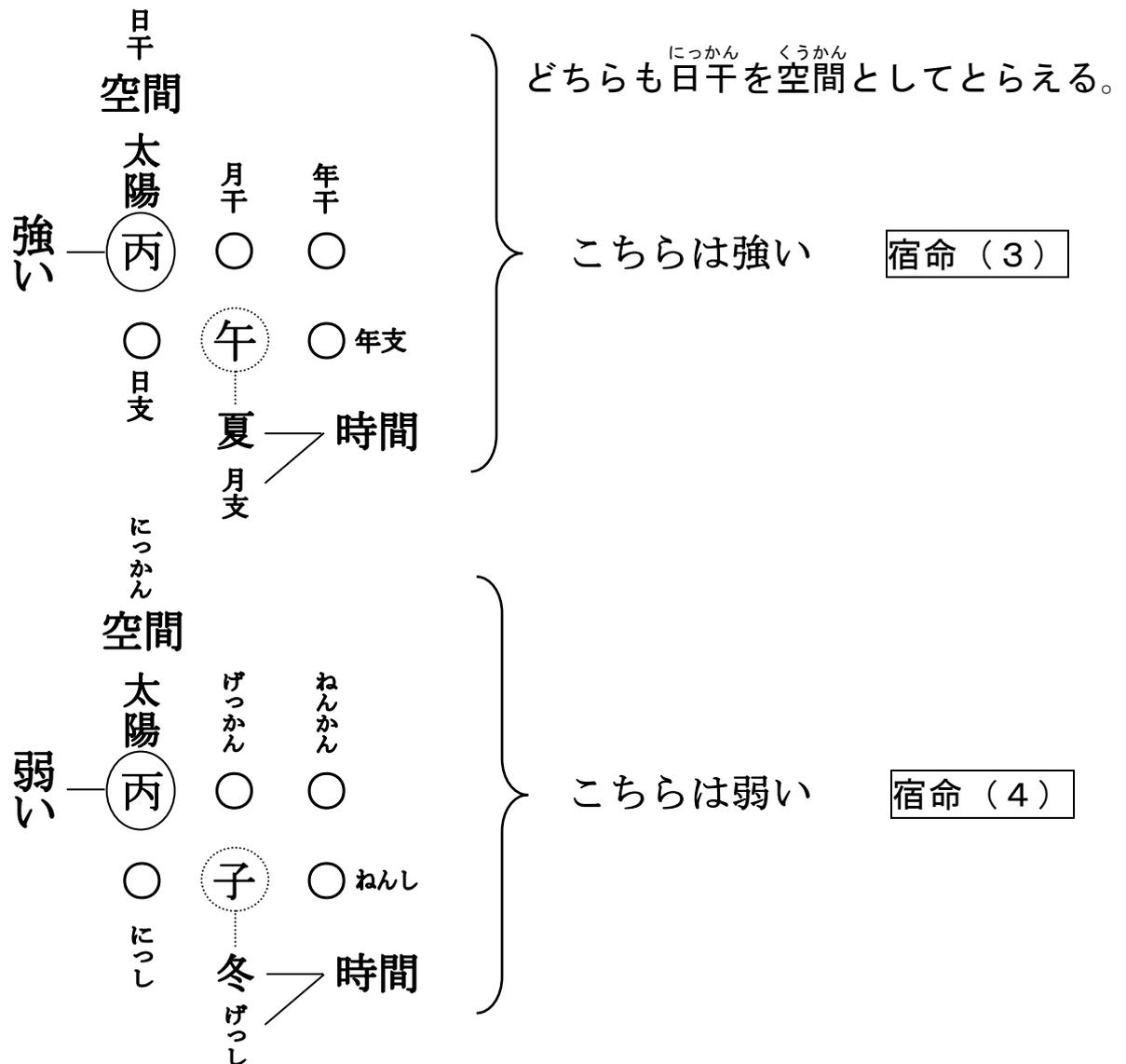


宿命 (1) 午月の丙火です。時間が加われば語れます。

月支の (午) は夏の十二支ですから季節は夏です。

**宿命(1)** 夏の太陽です。 **宿命(2)** 冬の太陽です。

「夏の太陽と冬の太陽では、どちらが強いですか？」と、訊かれたら、時間と空間にキチンとした基準がどちらにもありますから、強弱を語れます。



(月支) は季節を表す場所ですが、ここでは『時間』をあらわす場所ともいえます。

(月支) は時間。日干「丙火」は <sup>くうかん</sup> 空間 を意味します。

このように、強弱を語るには、空間と時間がともに必要です。どちらが欠けても強弱を語れません。

〔たとえば〕ネズミ月（子月）に生まれました。

「冬に生れた人は強いですか……？」といわれても、

丙火（太陽）という空間がなければ〔ネズミ月が強いのかどうか〕〔冬が強いのかどうか〕と訊かれても、比べようがないわけです。（子）の五行は水性・冬の十二支です。

〔たとえば〕丙火（太陽）がなくて、『冬生まれの人と、夏生まれの人とでは、どちらが強いのですか……？』と訊かれても、これも答えようがないです。

しかし「夏の丙火と、冬の丙火とでは、どっちが強いのですか……？」と訊かれたら、これは答えを出せます。

「夏の太陽は強いけど、冬の太陽は弱いです」と答えられます。

このように「十干」と（十二支）のどちらが欠けても、強弱は語れません。

「十干」と（十二支）の両方揃えば、つまり空間と時間の両方が揃えば答えを出せます。

算命学ではこのようにして、強弱を測<sup>はか</sup>って、比較をすることが出来ます。

「干<sup>かん</sup>」と(十二支<sup>じゅうにし</sup>)のどちらが欠けても強弱は語れません。このことは算命学で、強弱をみる・測<sup>はか</sup>るときの原則です。「旺相休囚死法」のほかにも、強弱をみる技法はありますが、それらの全てがこの原則に即<sup>そく</sup>しています。

⇒ 具体的に、ご自分の宿命をみて、どの程度強いのか、どの程度弱いのか、父親はどうなっているのか、子供はどうなっているのか、配偶者はどの程度の強さなのか、それらを占うのが「旺相休囚死法」です。

単純<sup>たんじゆん</sup>に [強いとか] [弱いとか] ではなく、おなじ強いのも、1 番強い『旺<sup>おう</sup>』の順位になる場合もあれば、つぎの 2 番目の順位『相<sup>そう</sup>』になる場合もあります。

弱いということでは……『囚<sup>しゅう</sup> (4 番目)』の順位は弱いですが、『死<sup>し</sup> (5 番目)』の順位はもっと弱いです。というように、5 つの順位に分類できます。

☞ 5つの順位に分類するときには……。

「日干支」「月干支」「年干支」に位置する人物の場所が必要です。「十干」と（十二支）の五行も必要です。

❖ 人物の場所

❖ 「十干」（十二支）の五行

ぜひ覚えてください

三柱は「日干支」「月干支」「年干支」三本の柱を意味します。  
一本の柱      一本の柱      一本の柱

☞ チカラの強弱をみるには、空間と時間の両方が必要です。

マラソンも現在の時代と、アベベ選手が裸足で走った時代とでは、シューズにしても、トレーニング方法も、科学的な分析方法も、時代が違いますから、おなじ基準での判別はできないと考えています。そのようにいいました。

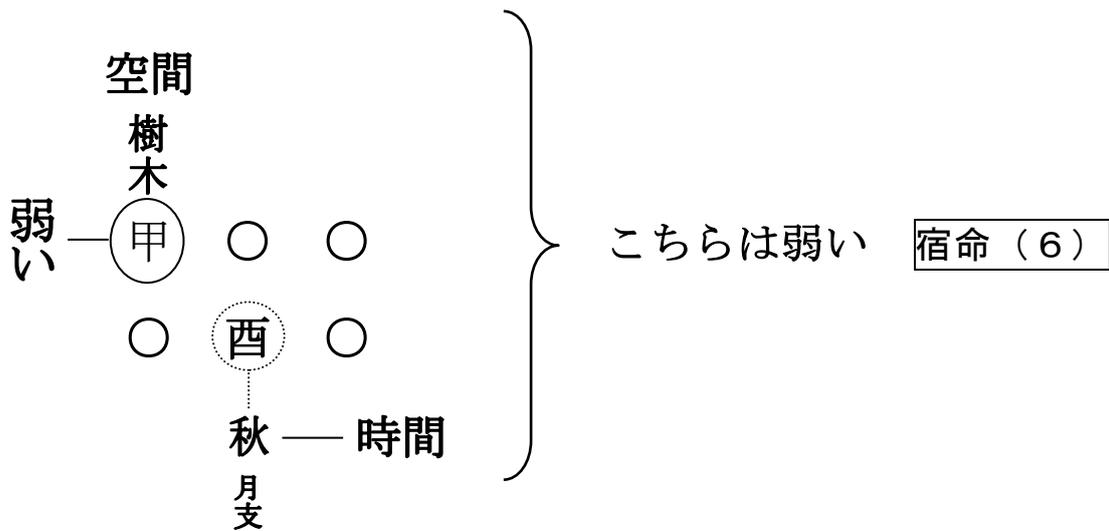
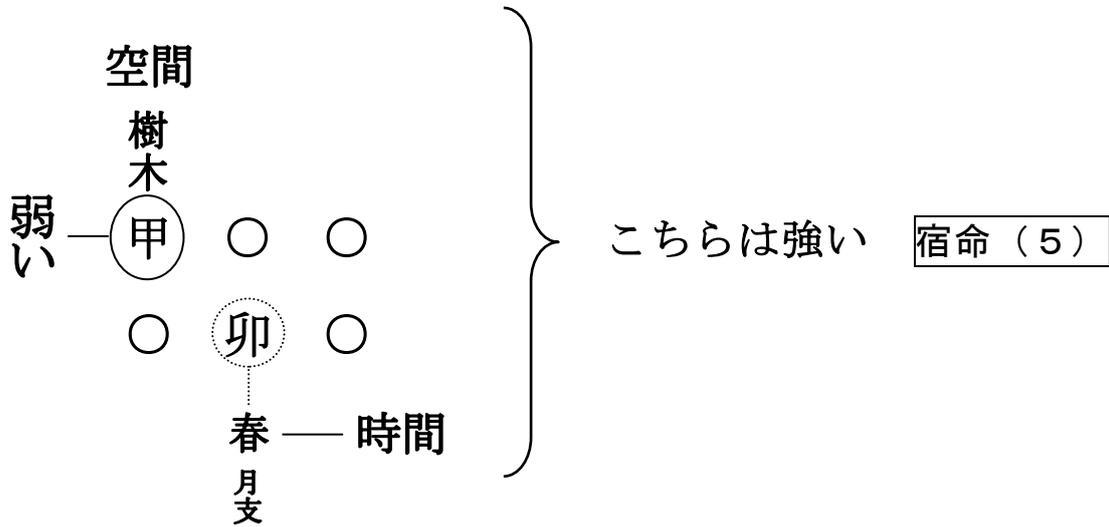
☞ 「旺相休囚死法」は、空間と時間がともに揃わないと強弱の判別はできないのです。

そこで 宿命(1) 宿命(2) そして 宿命(3) 宿命(4)

これらの命式に当てはめて考えたわけです。

もう2例つくりました ⇒ 宿命(5) と 宿命(6) ➡

☞ もう2例つくりました。



**宿命(5)** <sup>にっかん</sup> 日干は「<sup>こうぼく</sup>甲木」です。このように<sup>うづき</sup>卯月の甲木の人物がいたとします。卯月の甲木は春の樹木です。

**宿命(6)** <sup>にっかん</sup> 日干は「<sup>こうぼく</sup>甲木」です。この人は<sup>とりづき</sup>酉月の甲木です。酉月の甲木は秋の樹木です。〔春の樹木の宿命〕と〔秋の樹木の宿命〕では、どちらの季節の樹木のほうが強いのか

たとえば、春の樹木はどんどん成長する勢いがありますから**強い**です。

秋の季節は、樹木の成長が止まってしまい、枝葉を落として枯れたような姿になります。そういう季節の樹木ですから、樹木そのものに勢いがなくて**弱い**です。

このように比較することが出来ます。

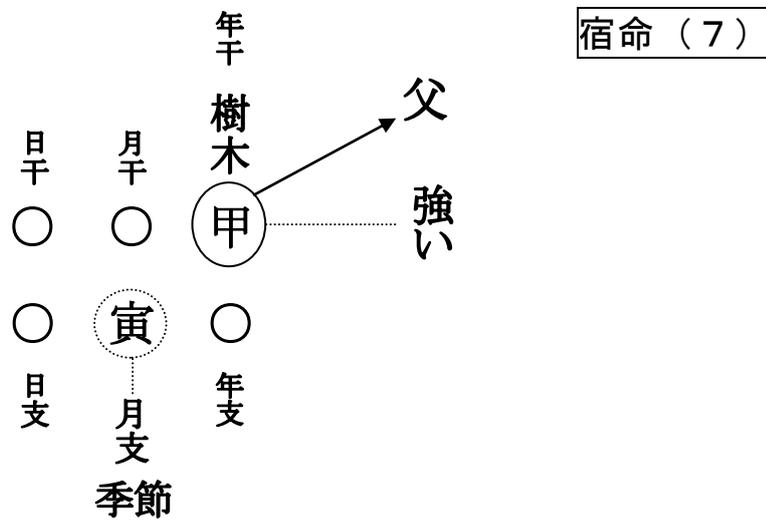
**宿命(1)** から **宿命(6)** の命式では、理解しやすいように、「日干」は太陽とか、「日干」が樹木とか、書きましたけど、この話は「日干」以外にも<sup>あ</sup>当てはめることができます。

つまり、甲木(樹木)が宿命の「年干」<sup>ねんかん</sup>にあるかも知れませんし、「月干」<sup>げっかん</sup>にあるかも知れません。あるいは(年支)<sup>ねんし</sup>とか(日支)<sup>にっし</sup>の二十八元<sup>にじゅうはちげん</sup>のなかにあるかも知れません。

甲木がどの場所にあっても、春の樹木なら勢いがあるって強いです。というふうに論じることが出来ます。

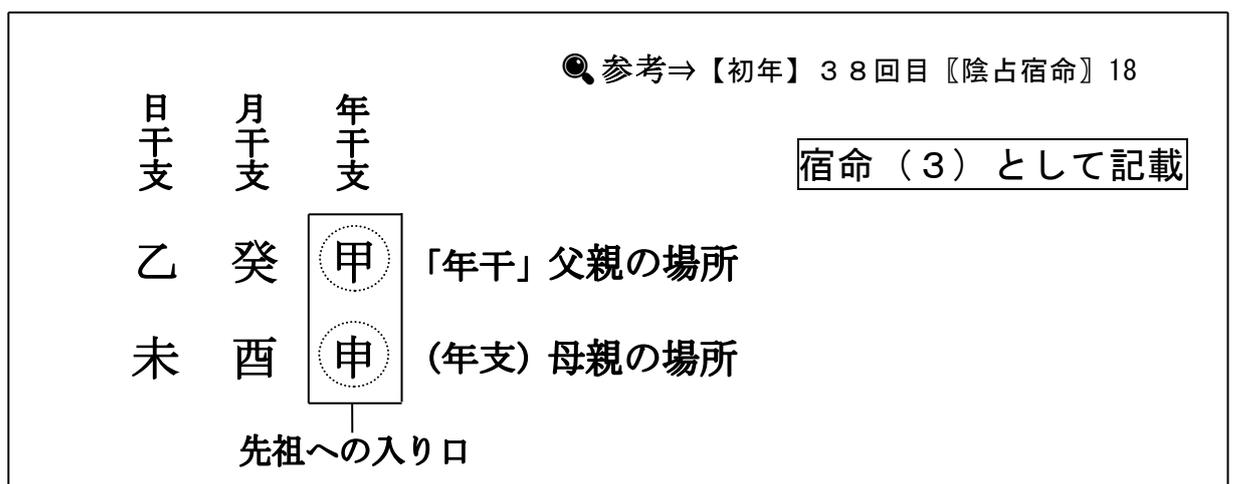
【たとえば】「甲木」が年干にある人物はどうでしょう ➡

〔たとえば〕「甲木」が年干にある人物がいたとします。



**宿命(7)** (寅月) の甲木は春の樹木ですから、この父親は強いです。そう読めるわけです。

年干は父親の場所です。そうしますと、日干はなにも書かれていませんけど、この人物の場合は、お父さんは強い人ですね。という占いになっていくわけです。



⇒ 月支を基準にして——ほかの五行の強弱を見る技法  
が「旺相休囚死法」<sup>おうそうきゅうしゅうしほう</sup>です。

宿命をだしたときに、それぞれの人の（月支）が春とか、夏とか、秋とか、冬であったりするわけです。

月支を中心（基準）にして〔この人物の場合は日干が強い<sup>にっかん</sup>です〕とか〔この人は月干が弱いです〕あるいは〔年支は中位の強さです〕とかを観ていきますが、そのときに（月支）<sup>げっし</sup>を中心にして、つまり基準にして、ほかの五行の強弱をみる技法が「旺相休囚死法」です。

⇒ 理解しやすいように **宿命（5）** と **宿命（6）** を書きました。**宿命（6）** は〔秋の樹木と、春の樹木では、どちらが強いのか〕そのように問いかけました。

春の季節は樹木がどんどん成長する<sup>いきお</sup> 勢いがあるから強い  
です。

このように言えるわけですが、これは〔春の樹木だから<sup>いきお</sup> 勢い  
があつて強い〕という表現ではなくて、もう少し明確な基準があります。

その基準は「日干」と（月支）の関係がどのような状態

になっていると強いのか、どういう関係になっていると弱いのか、どうして中位ちゅうくらいなのか——それについて基準があります。それが「旺相休囚死法」の基準になります。

おうそうきゅうしゅうし  
「旺相休囚死法」のチカラの強さの順位は5段階です。  
五段階に分類しています。

『旺』 1番強い

『相』 2番

『休』 3番

『囚』 4番

『死』 5番で一番弱い

強弱の順位は5段階です。

宿命の月支は季節をあらわす場所です。

月支の（十二支）その宿命が位置している時間の性質を意味します。

☞ 重複する箇所もありますが説明を進めます。

## 参考資料

## 【旺相休囚死法】

算命中庸学

旺相休囚死法 …… 季節の時間と空間の力関係

月支 季節	寅 卯	午 巳	辰戌未丑	申 酉	子 亥
旺	木性	火性	土性	金性	水性
相	火性	土性	金性	水性	木性
休	水性	木性	火性	土性	金性
囚	土性	金性	水性	木性	火性
死	金性	水性	木性	火性	土性

旺…時間と比和となる空間（違和感がなく一体となれる。空間が

時間と共に持てる力を存分に発揮できる）

相…時間に生じられる空間（空間は時間の助けを得て力をつけている状態）

休…時間を生じる空間（空間は余力を使ってしまっている状態）

囚…時間に剋される空間（空間は時間の助けを得られない上に傷めつけられる）

死…時間を剋す空間（空間が時間の味方を得ることができず最も弱くなり力を失う）

🔍 20 ページの **参考資料** 【旺相休囚死法】 を見てください。

📖 時間は十二支盤に配置された（季節の十二支）を意味します。

📖 空間は「十干」<sup>じっかん</sup> を意味します。

🔗 『旺』<sup>おう</sup> 月支<sup>げつし</sup> と比和<sup>ひわ</sup> になる空間<sup>くわん</sup>

旺相休囚死法では……宿命<sup>げっし</sup> に月支と〔比和〕になる空間があれば『旺』になります。このように考えてください。

時間は月支（季節の十二支）（月の十二支）を意味しています。

🔗 『相』<sup>そう</sup> 月支<sup>げつし</sup> に生じられる空間<sup>くわん</sup>

月支から生じられる空間があれば、それは『相』になります。

ということです。

『休』<sup>きゅう</sup> 『囚』<sup>しゅう</sup> 『死』<sup>し</sup> も、時間というのは月支を意味します。

🔍 空間と時間については ⇒ 9 頁を参考にしてください。

十干 ———— 空間「五行を陰陽に分けたもの」

十二支 ———— 時間（1 年を十二区分したもの）

「十干は空間」（十二支は時間）をあらわします。

🔍 **参考資料** 【旺相休囚死法】 20 頁の「表」の見方を説明します。

【旺相休囚死法】 **月支が基準** 月支は季節をあらわします。

〔たとえば〕 寅と卯は春の十二支です。辰は春と夏の季節の調整役です。

月支 季節	寅 卯	午 巳	辰戌未丑	申 酉	子 亥
旺	木性	火性	土性	金性	水性
相	火性	土性	金性	水性	木性
休	水性	木性	火性	土性	金性
囚	土性	金性	水性	木性	火性
死	金性	水性	木性	火性	土性

月支 季節 は宿命の (月支) のことです。季節をあらわします。

『旺』 (月支=時間) が (午) なら五行は火性で、夏の十二支です。

月支の火性と〔比和〕になるものが、宿命にあれば『旺』になります。

月支と〔比和〕になる「十干」あるいは (十二支) が宿命にあれば、それらは『旺』になります。

🔍 26 頁からの **宿命 (1) ① ② ③ ④** を参照ください。理解が深まります。

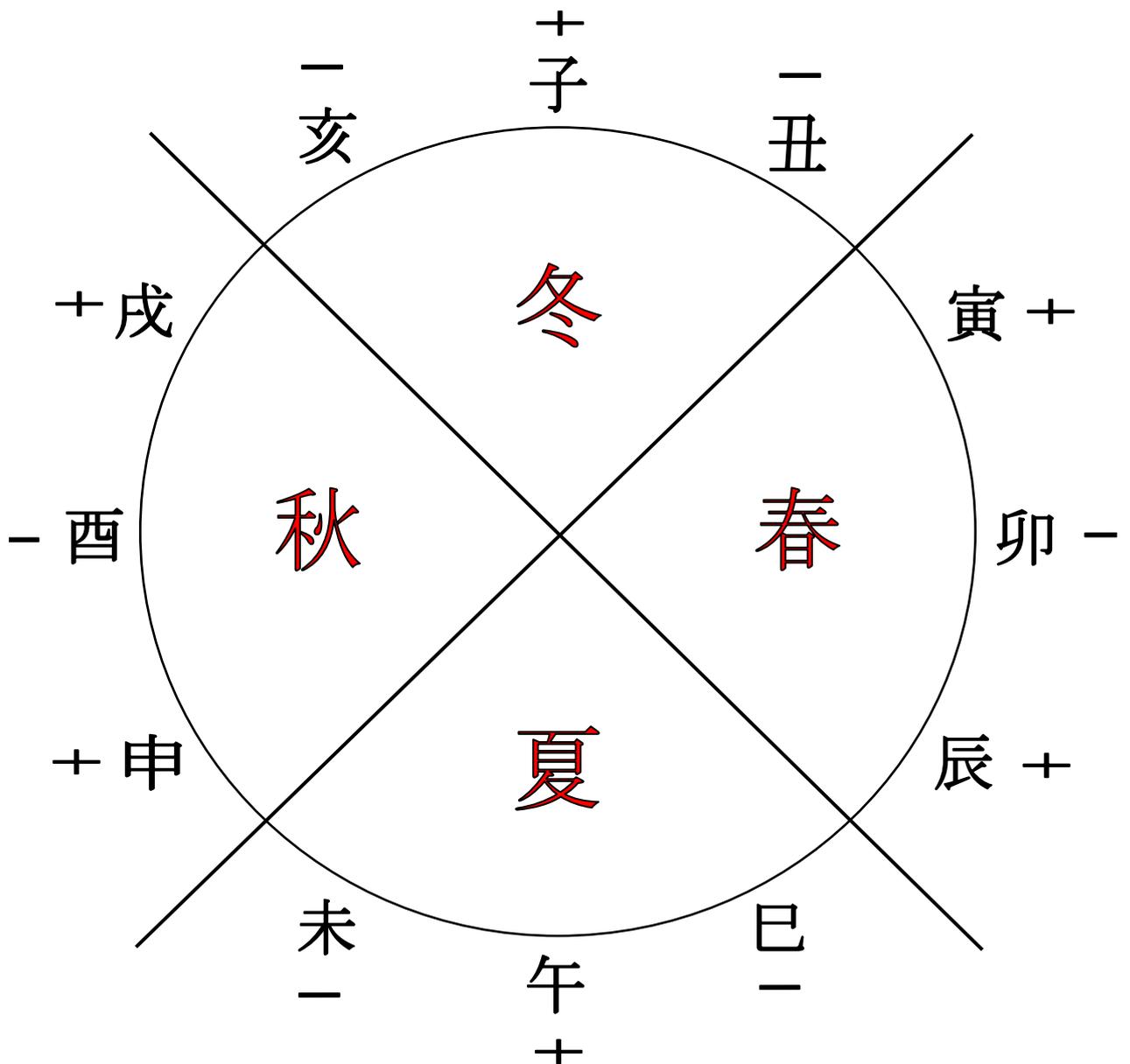
『旺』 (月支=時間) が (午) なら、五行は火性で夏の十二支です。

その月支と〔比和〕になる「十干=空間」と、日支あるいは年支の五行が金性なら『旺』になります。 **旺相休囚死法は (月支) が基準**

🔍 参考〔季節の十二支盤〕を載せました。

亥（陰の水性）、子（陽の水性）、丑（陰の土性） 冬と春の季節の調整役です。

寅（陽の木性）、卯（陰の木性）、辰（陽の土性） 春と夏の季節の調整役です。



巳（陰の火性）、午（陽の火性）、未（陰の土性） 夏と秋の季節の調整役です。

申（陽の金性）、酉（陰の金性）、戌（陽の土性） 秋と冬の季節の調整役です。

【初年】 8 回目【十二支と陰陽論】 02 頁〔季節の十二支盤〕の図です。

⇒ 『旺』<sup>おう</sup> は、時間と比和になる空間です。

旺相休囚死法では……宿命に月支と〔比和〕<sup>げっし</sup>になる空間があれば『旺』になります。このように考えてよいのです。

空間は十干を意味します。

時間は月支（季節の十二支）であり（月の十二支）を意味しています。

⇒ 『相』<sup>そう</sup> は、<sup>月支</sup>時間に生じられる<sup>十干</sup>空間

月支から生じられる空間があれば、それは『相』になります。

ということです。

『休』<sup>きゅう</sup> 『囚』<sup>しゅう</sup> 『死』<sup>し</sup> も（時間というのは月支を意味）します。

🔍 時間と空間については ⇒ 9頁を参考にしてください。

十干 ————— 空間「五行を陰陽に分けたもの」

十二支 ————— 時間（1年を十二区分したもの）

「十干は空間」（十二支は時間）をあらわすということでした。

📖 26 ページからは「旺相休囚死法」の1つ1つを説明します。

説明してゆきますが——読むだけではなくて、記載されているのとおなじように、宿命・記号をルーズリーフなどに書くことをお勧めします。練習です。

そのときに、ご自分の記憶にとどめるような事柄があれば書き加えておくとよいですね。書くと習熟しゅうじゅくしますから、実際に占うようになるときに役立ちます。

参考：習熟〔なれて十分に会得すること〕

勉強の記述はノートよりもルーズリーフ用紙をお勧めします。ただし、ノートと違ってバラバラになる可能性があります。必ず、用紙にタイトルとページなどを書き込むとかして、管理するとよいでしょう。

これらのやり方はご自由です。

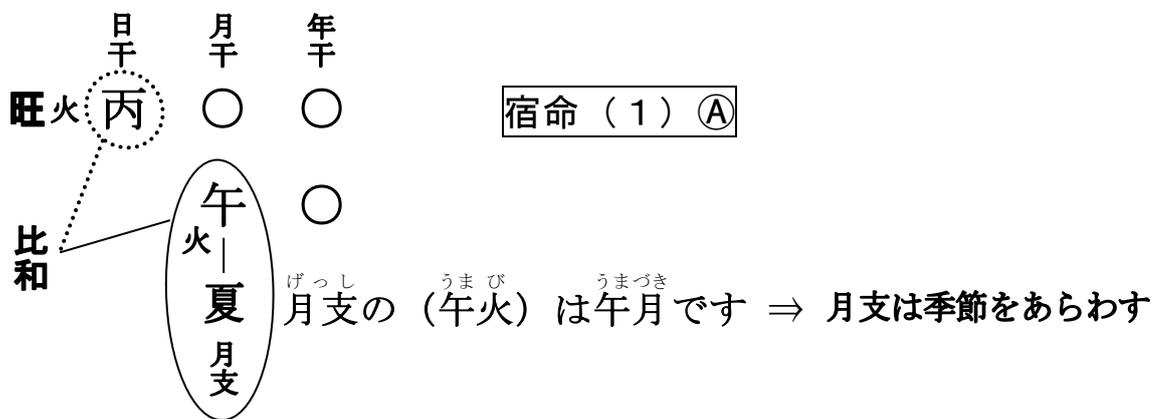
実際に占うときは、陰占の干支、人体図の星を読み解いていきます。

それゆえ、干支・命式などの（読み方）（書き方）の練習とおもって行動するとよいでしょう。

□ 【旺相休囚死法】 1つ1つを説明します。

⇒ 『旺』 <sup>おう</sup>月支と<sup>げっし</sup>比和<sup>ひわ</sup>になるもの。

<sup>げっし</sup>月支と<sup>ひわ</sup>比和になるものがあると、それが『旺』になります。



宿命 (1) ㊤ は、<sup>うまづき</sup>午月の<sup>へいか</sup>丙火という宿命です。真夏の太陽です。  
真夏の丙火は強いです。(夏の陽射しは強烈です)

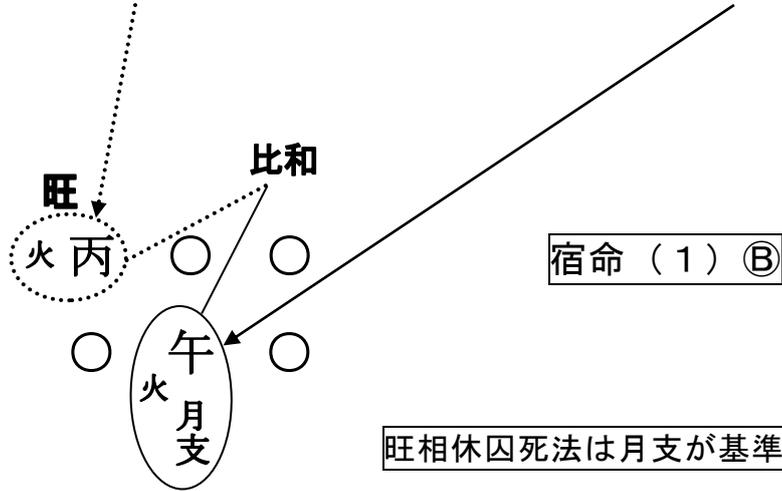
参考資料 【旺相休囚死法】 20 ページに『旺』の記載があります。

旺…時間と比和となる空間(時間と空間に違和感がなく一体となれますから、お互いの持てる力を存分に発揮できる)

宿命 (1) ㊤ をみると、日干「<sup>へいか</sup>丙火」と月支(<sup>うま</sup>午)はおなじ火性ですから一体となれます。チカラをおもろがままに発揮できる姿といえます。

「旺相休囚死法」をつかって **宿命(1)㊸** を説明します。

日干は「<sup>へいか</sup>丙火」という火性。月支も(<sup>うまび</sup>午火)という火性です。



**宿命(1)㊸** を五行で考えると、日干「丙火」と月支の(午)はおなじ火性ですから〔比和〕になっています。

旺相休囚死法は **月支が基準** ですから、月支(午)の火性が基準です。その月支と〔比和〕になるものが『旺』です。

このことは「旺相休囚死法」の決まり事です。

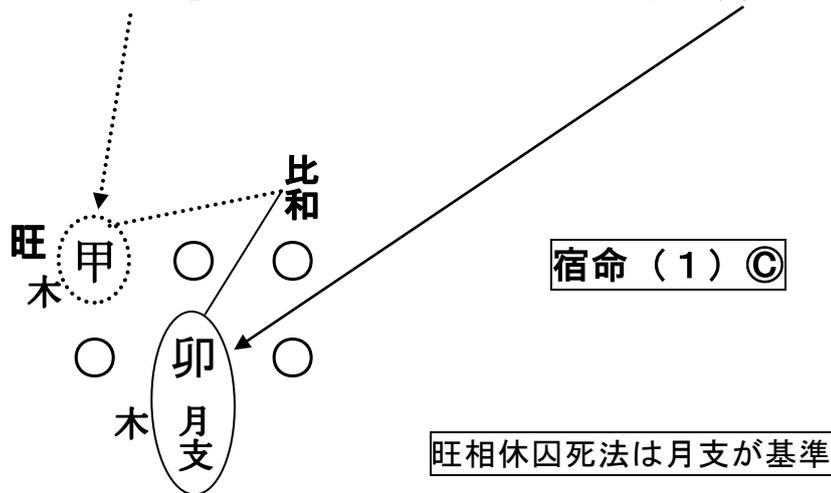
**宿命(1)㊸** の日干は「<sup>へいか</sup>丙火=太陽」で、月支は(<sup>うまび</sup>午火)という十二支になっています。

(午)を十二支盤で見ると、夏の十二支(巳**午**未)のなかにあります。🔍参考〔季節の十二支盤〕を見るとわかります⇒ 23 ページ  
夏の十二支の**中心**に位置していますから、月支が(午)というだけで(火性の<sup>ちから</sup>力が強い)という意味になります。

陰占の宿命を観るときには、月支は自分の立地（生まれた環境・季節）を意味します。月支に（午）がありますから、この人物は夏生まれということになります。日干は「丙火=太陽」で、月支に（午）がありますから、この人物は夏の太陽と考えます。夏の太陽は強いです。

**宿命（1）◎** について「旺相休囚死法」で説明します。

日干は「甲木」という木性で、月支も（卯木）という木性です。



卯月の「甲木」は春の樹木。どんどん成長する勢いがある時期ですから“この樹木は強い”です。月支（卯木）が基準です。

もう少し言葉を加えると、日干「甲木」は木性、月支も（卯木）という木性です。

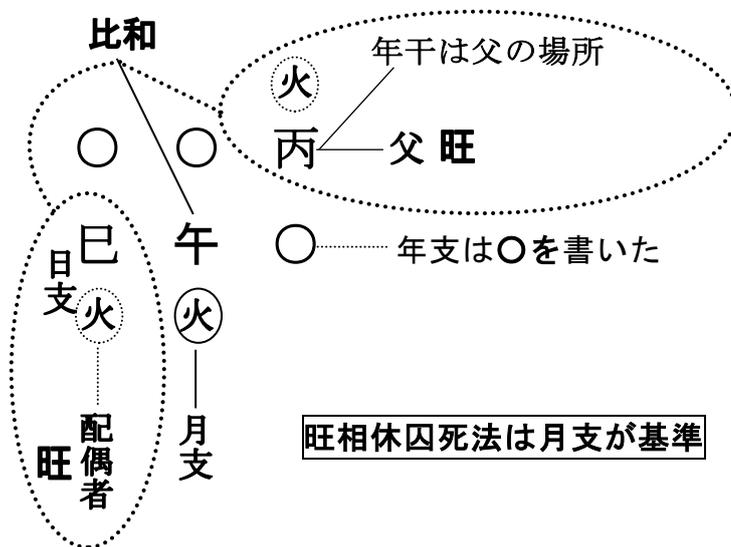
日干「甲木と月支（卯木）はおなじ木性ですから〔比和〕です。

それゆえ、この「甲木」は『旺』になるわけです。

重複しますが……日干「甲木」で、月支が（卯月）という、木性の月に生まれたということは、春の（卯月）そのものに自然界のなかで〔木性の力が強い季節〕という意味もありますが、**旺相休囚死法は月支が基準** ですから月支と比和になるものがあれば、それは『旺』になります。

⇒ [たとえば] **宿命(1) ㊦** のように、月支は（午月）の火性で、年干に「丙火」の<sup>火</sup>があります。日支にも（巳火）という<sup>火</sup>がありますから、〔月支と比和〕になるのは、年干の「丙火」と日支の（午）です。

**宿命(1) ㊦**



日支も火性で、この火性はすごく強いです。

「年干」父親の場所ですから、父親が『旺』になります。

（日支は配偶者の場所）ですから、配偶者も『旺』になります。

☞ 旺相休囚死法は **月支が基準** です。「<sup>てんかん</sup>天干と<sup>ちし</sup>地支は何なのか——」  
「<sup>ごぎょう</sup>五行は何になるのか——」 個々の宿命でみることになります。

**宿命 (1) ㊦** の月支は (午) <sup>うま</sup> ですから、<sup>うまづき</sup> 午月生まれの宿命です。  
年干の「<sup>へいか</sup>丙火」は火性です。日支の (巳) <sup>み</sup> も火性です。

月支 (午) と年干「<sup>へいか</sup>丙火」は、<sup>ごぎょう</sup> 五行はおなじ火性の〔比和〕です  
から、父親は『旺』になります。

そして、月支 (午) と日支 (巳) も〔比和〕になっていますから、  
配偶者も『旺』になります。

この配偶者は『旺』ですごく強いです。ということになります。

具体的な観方は後<sup>あと</sup>でご説明しますが、**宿命 (1) ㊦** の日干の人物  
は、父親と配偶者には逆<sup>さか</sup>らえない人になります。といえます。

「この2人は強いです。逆らえませんか」というふうに占いをし  
ていくようになります。

**宿命 (1) ㊦** を見ておわかりのように、〔月支と比和〕とい  
うのは、「日干」だけに限られたことではないのです。

〔月支と比和〕になるものが、宿命の何<sup>どこ</sup>処にあっても、  
そこが『旺』になるということです。

☞ 2番目に強い『相』<sup>そう</sup>の説明に入ります。

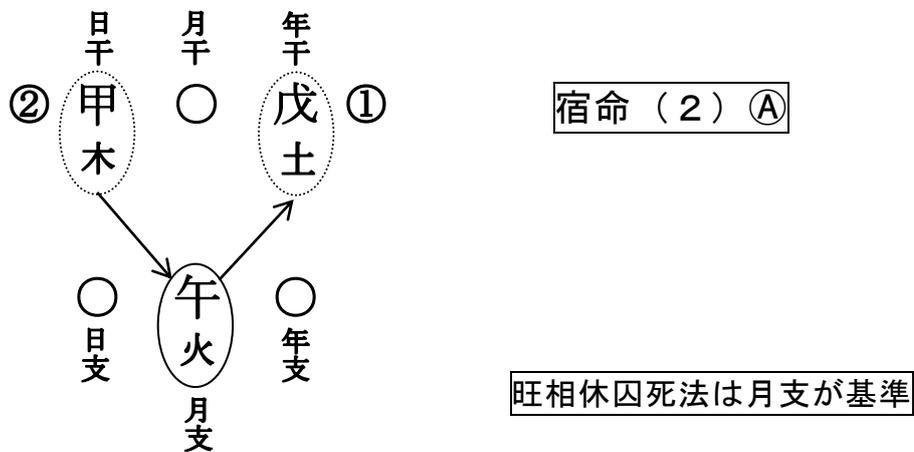
続けて、3番目に強い『休』<sup>きゅう</sup>も一緒に説明します。

『相』<sup>そう</sup> 月支に生じられるもの。(相生関係)

『休』<sup>きゅう</sup> 月支を生じていくもの。(相生関係)

☞ 『相』<sup>そう</sup> 月支に生じられるもの。(相生関係)<sup>そうしょうかんけい</sup>

[たとえば] 宿命(2)Aの宿命の人がいたとします。



宿命(2)A 月支は(午火)の火性です。

① 年干は「戊土」という土性で、月支の火性から(火<sup>しょう</sup>→土)と相生されています。

(火<sup>せい</sup>→土)と火が燃え尽きて土になる相生です。

相生は(助けるような関係)が基本です。

② 日干「甲木」のほうは、(木→火) と月支の火性に対して相生になっています。(木<sup>しよ</sup>→火) と樹木が燃えて火になる相生です。

**参考資料** 【旺相休囚死法】 20 ページに『相』の記載があります。

相…時間に生じられる空間（空間は時間の助けを得て力をつけている）と書かれています。つまり、相というのは時間に生じられる空間で——時間の助けを得ることで力をつけている。このように言っているわけです。

**宿命（2）①** をみてください。時間に生じられる空間というのは

① 年干「戊土」のことです。その「戊土」は月支（午火）から(火→土) と生じられています。つまり「戊土」は月支の（午）に助けてもらって力を発揮できます。そうしますと、「戊土」は月支の（午火）から助けてもらった分だけ強くなれるわけです。

**宿命（2）②** を見ておわかりのように、①と②の両方に相生関係が存在します。しかし、相生の矢印の向きが違います。

① 年干「戊土」は、月支から（火→土）と助けてもらっています。

（年干が月支から助けられる相生関係）

② 日干「甲木」は、（木→火）と自分のほうから月支を助けにいきます。

（日干が月支を助ける相生関係）

①と②の相生関係はどちらのほうがかか負担を抱えて大変だとおもいますか……？ ②の助けに行く甲木のほうが大変です。

① 年干の「戊土」は、月支の（午）から（火→土）と生じられている姿です。月支の（午）は自分の力を消費して、「戊土」を助けるわけですから、月支の力が弱ります。

それゆえ、月支（午火）より、年干「戊土」のほうが強いです。「戊土」のほうは、自分の力が余っていますから強いわけです。

② 日干「甲木」は（木→火）と月支（午）を助けるために自分の力を消耗して疲れてしまうので（少し弱い）と考えます。

①を言葉で表現すると、つぎのようになります。

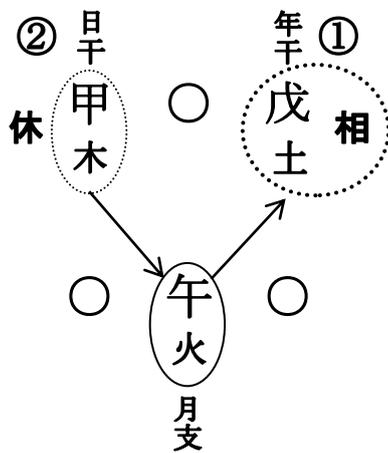
『相』 月支から助けてもらった分だけ強くなる。

おなじ相生関係でも「戊土」は月支の（午火）から、（火→土）と助けてもらうので、得したようなものです。助けてもらった分だけ強くなります。余力があります。

『相』はこのように（月支から生じられる）相生関係です。

「戊土」が『相』になります。

宿命(2) ㊦ をみてください。



宿命(2) ㊦

旺相休囚死法は月支が基準

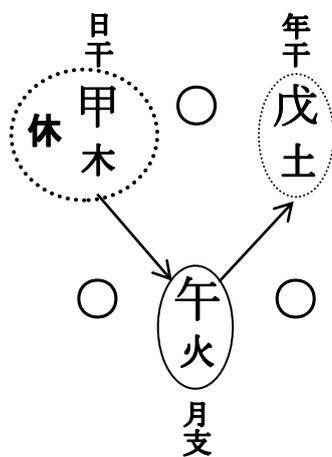
① 年干「戊土」が『相』になります。

② 日干「甲木」は『休』になります。

このように、相生関係でも『相』と『休』では異なります。

⇒ 『休』 月支を生じるもの (相生関係)

**宿命 (3) ①** 日干「甲木」は自分のほうから (木→火) と、月支 (午火) を助けるために力をつかいます。



**宿命 (3) ①**

旺相休囚死法は月支が基準

文章にすると：

『休』 月支を助けるために力をつかってしまい、その分だけ力が弱まる。というのが『休』になります。

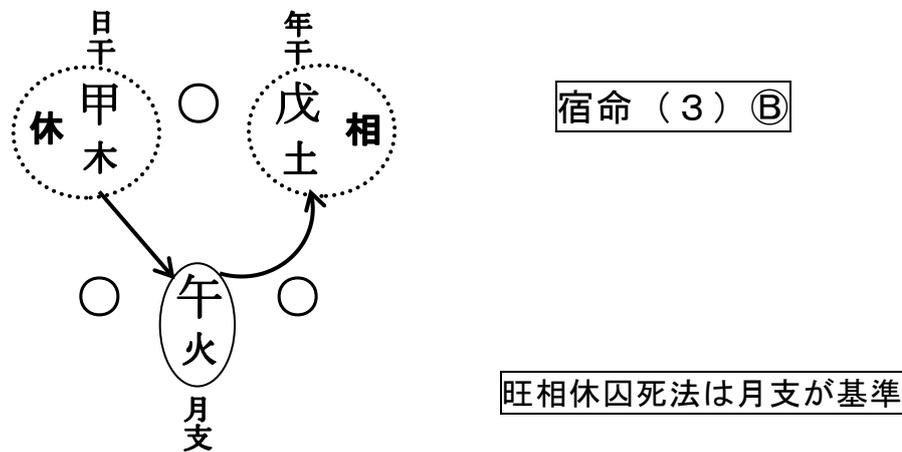
**参考資料** 【旺相休囚死法】 20 ページに『休』の記載があります。

休…時間を生じる空間 (空間は余力を使ってしまっている状態)

**宿命 (3) ①** ここでの……時間を生じる空間というのは、日干「甲木」が (木→火) と、月支の火性の勢いを増すために、自分の力をつかいます。そのために「甲木」は自分の余力を消耗する姿です。

**宿命 (3) ①** の日干「甲木」は (木→火) と月支 (午火) の火力を強くするために、月支を生じています。

「甲木」は自分の力をつかって、(午火) を助けていますから、おなじ相生でも **宿命 (2) ①②** と比べて、**宿命 (3) ①** のほうは少し弱いのです。それで **宿命 (3) ①** は『休』になります。



**宿命 (3) ②** 年干「戊土」は月支から (火→土) と生じてもらうと、助けて (生じて) もらった分だけ、土性は強くなります。

逆に、日干の「甲木」が (木→火) と、月支の午火を助けると、木性は力を消耗します。その分だけ自分は弱くなるのです。

このような考え方を理解なさっておいてください。

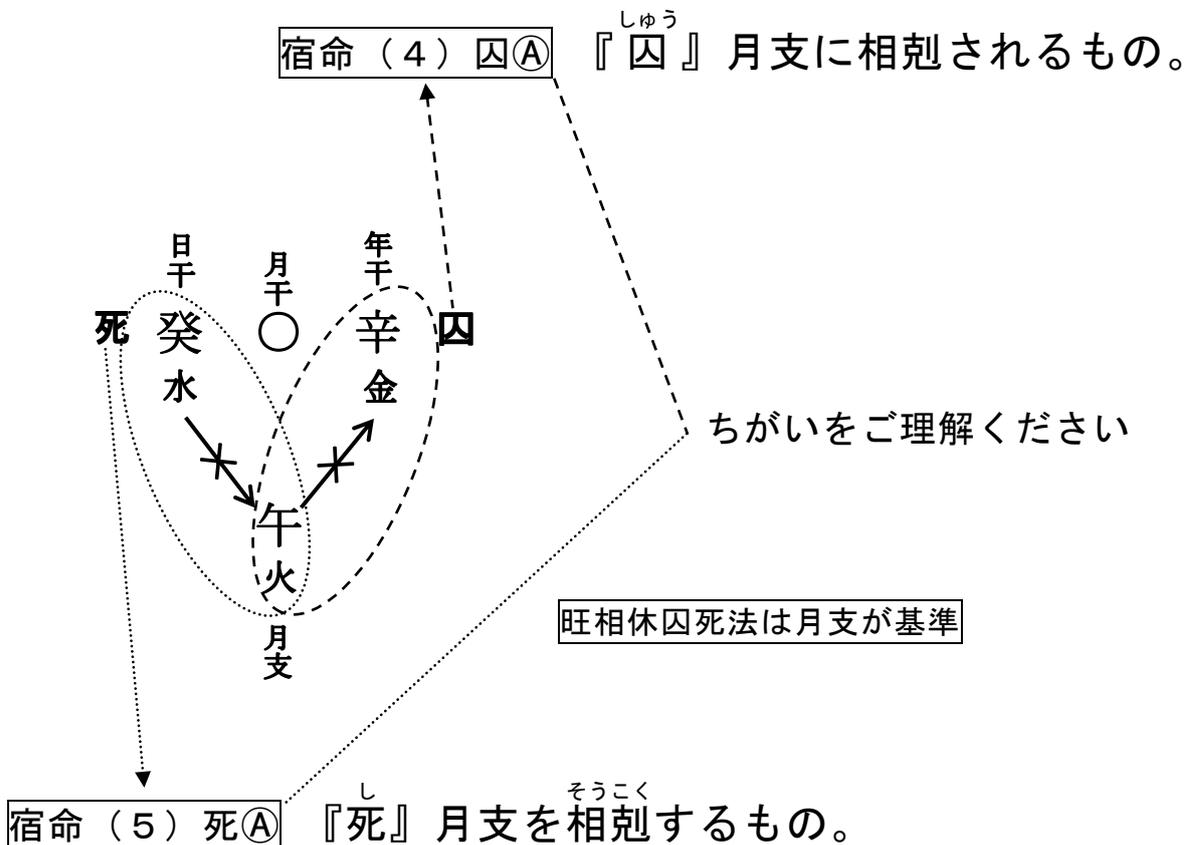
運勢を観るときには、この考え方を応用する場面も出てきます。

⇒ 相剋関係が2つ残っています。

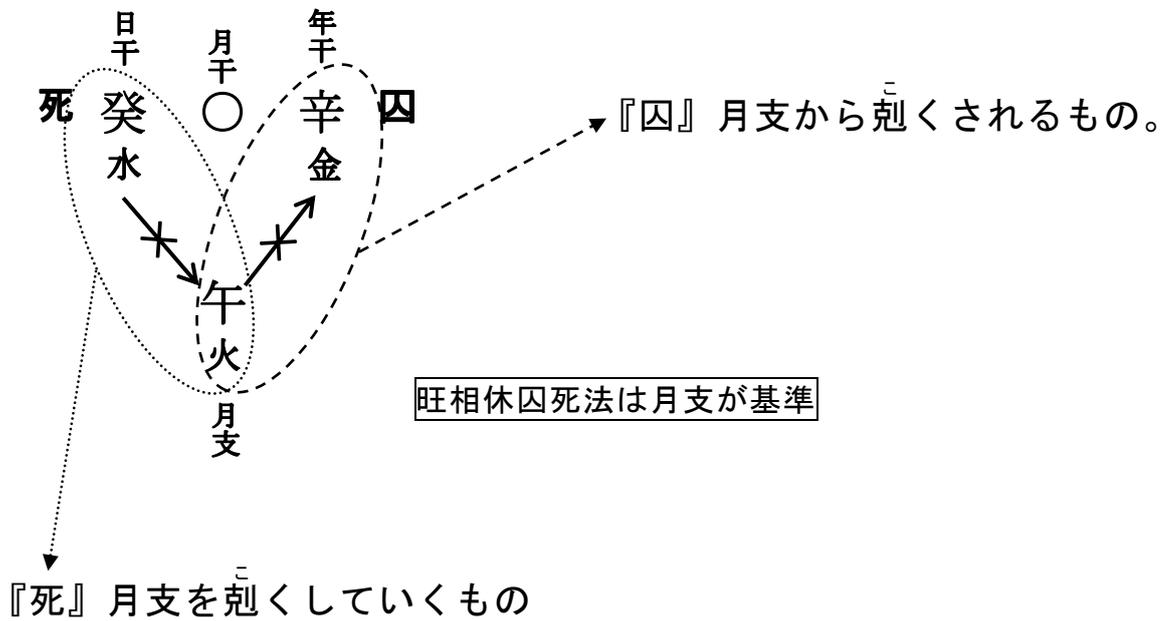
『囚』と『死』です。

相剋関係というのは、(水→×火) と水が火を消す。火炎が (火→×金) と金属を熔解する。樹木が (木→×土) と土を砕いて根を張る。というように「相手をやっつける」そのような関係が相剋です。

⇒ 三柱の「日干」「月干」「年干」どの場所にあっても構いません。ここでは「日干」と「年干」に載せました。



宿命（4）囚<sup>㊤</sup> と 宿命（5）死<sup>㊤</sup> 両者のちがいを説明します。



宿命（4）囚<sup>㊤</sup> 『囚』月支から剋こくされるもの

月支は（午）という火性の月です。

年干の「辛金」が、月支の火性から（火→<sup>こ</sup>く金）と剋こくされています。月支にやっつけられている辛金しんきんが『囚』になります。

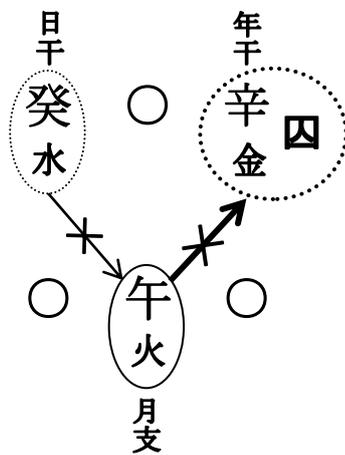
宿命（5）死<sup>㊤</sup> 『死』月支を剋こくすもの

月支は（午）という火性の月です。

日干の「癸水」が、（水→<sup>こ</sup>く火）と月支の火性を剋こくしていく姿です。月支をやっつけている癸水きすいが『死』になります。

👉 つぎのページから『囚』と『死』を個々に説明します ➡

⇒ 『囚』 月支から剋くされるもの



宿命 (4) 囚⑧

旺相休囚死法は月支が基準

宿命 (4) 囚⑧ 月支の (午火) から、(火→×金) と年干の「辛金」が剋されています。

月支の (午) は夏の火性ですから、最初から火性が強烈な季節だということは決まっています。強い火性に (火→×金) と傷めつけられるのは当然なので、手向かわないで、やられっぱなしのほうがまし。という考え方です。

月支より弱いのが『囚』です。

文章にすると：

『囚』—— 強い月支に剋くされるのなら、剋くされっぱなしになるほうがましである。

参考：まし (どちらかといえば、手向かいしないほうが、いい状態にあること)

**参考資料** 【旺相休囚死法】 20 ページに『囚』の記載があります。

囚…時間に剋くされる空間(空間は時間の助けを得られない上に傷めつけられる)

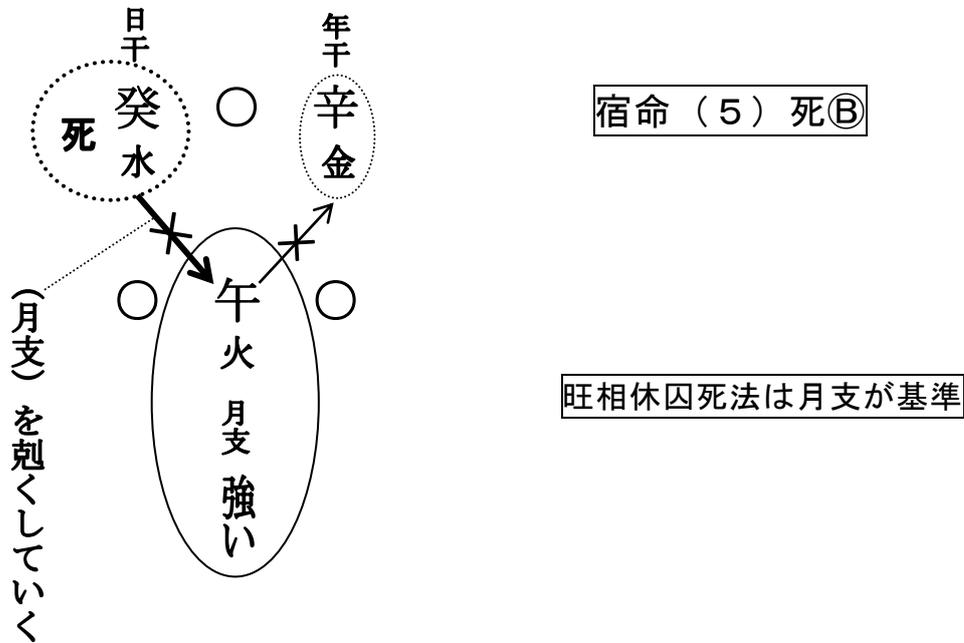
☞ 時間は月支(午火)のことであり、空間は年干「辛金」のことであり、

**宿命(4) 囚⑧** ここでの「時間に剋くされる空間」というのは、強い月支(午火)から、(火→×金)と年干の「辛金」が剋かれています。

ほかからの助けもないので、強い月支に手向かいしないで、剋かされているほうが被害は少ない。という考え方です。

月支に剋かされている年干の「辛金」が『囚』になります。

⇒ 『死』 月支を剋くしていくもの



宿命 (5) 死B 月支 (午火) の強い火炎に対して、日干の癸水が自分のほうから (水→×火) と、燃え盛る炎に飛び込んでいくのは、バケツの水をかけるようなものです。

水は蒸発して無くなってしまいます。

火性は勢いがあるので多勢、水性を無勢と考えると理解しやすいでしょう。

参考：多勢に無勢 (少人数で多勢に向かって、とても敵対しがたいこと)

宿命 (5) 死A B については…… [飛んで火に入る夏の虫] で、自分が受ける損傷のほうが大きくなってしまいうのです。

文章にすると：

『死』強い月支に対して、自分から立ち向かっていくと、  
より大きな損傷を受ける。

⇒ 『死』の考え方は、一般的にさまざまに応用できます。

〔たとえば〕人間関係で強い人がいるとします。

会社でいえば社長とか会長でしょう。社長が1番偉いとすれば、その社長から（火→×<sup>か</sup>金<sup>きん</sup>）とやっつけられる、あるいは、怒られるのであれば、口答えとかをしないで、怒られっぱなしになっていたほうが少しはましでしょう。

その社長に、自分のほうから（水→×<sup>すい</sup>剋<sup>か</sup>）とケンカを仕掛けてしまうと、自分が受けるダメージが大きくなると言っています。

⇒ これは戦争でもおなじようなものです。

過去において、アメリカがイラクと戦争してフセイン政権を倒しました。イラク側はほとんど抵抗しなかったようです。

（火→×<sup>か</sup>剋<sup>きん</sup>）とアメリカが攻めたとき、イラク兵士の半分位は逃げてしまったといわれています。

やられっぱなしのほうがダメージは少ないのです。

太平洋戦争は、日本のほうから戦争を仕掛けて、真珠湾を攻撃したとなれば、相手が強いとわかっているはずですから、自分の受けるダメージは大きなものになるわけです。

これらのことは「宿命」に関係なくいえることです。

『囚』と『死』は弱いほうに位置します。

『囚』のほうが『死』よりは“いくらか” ましと考えています。

『囚』より『死』のほうが弱いです。

【旺相休囚死法】 1つ1つを説明します。ということで、26 頁から命式を添えて記載しました。

『五段階の順位』はこれまで説明した観点によって決められたのです。

参考：観点〔物事を考察するとき、判断の根拠となる一定に見地〕

実際に【旺相休囚死】を決めるとき『5段階の順位』を  
おぼ  
覚えていなくても大丈夫です。

**参考資料** 【旺相休囚死法】の「表」を見ながらでよいのです。

🔍 **参考資料** 【旺相休囚死法】 20 頁「表」の見方を説明します。と  
 いうことで、22 頁に記載しましたが **表の見方を復習** です。

【旺相休囚死法】 **月支が基準** 月支は季節を意味します。

月支 季節	寅 卯	午 巳	辰戌未丑	申 酉	子 亥
旺	木性	火性	土性	金性	水性
相	火性	土性	金性	水性	木性
休	水性	木性	火性	土性	金性
囚	土性	金性	水性	木性	火性
死	金性	水性	木性	火性	土性

**月支/季節** というのは、宿命の月支のことであり、季節を意味します。

〔たとえば〕 月支が（寅月）あるいは（卯月）生まれの人物で、宿命のなかに木性の「干」<sup>かん</sup> あるいは（十二支）<sup>じゅうにし</sup> があれば、それは旺であり、火性があれば相です。水性だと休、土性であれば囚、金性だと死です。

順位は「表」を見ながら決めたほうが間違いは起こりません。

☞ [強い] [弱い] とかですが『旺が1番』『相が2番』『休が3番』となっています。この強さというのは——  
[何についての強さを意味しているのか] ということを知っておく必要があるわけです。

「旺相休囚死法」の [強い] [弱い] あくまでも <sup>げっし</sup>月支 に対して [強いのか] [弱いのか] です。

月支が <sup>うま</sup>(午) であれば、<sup>うまづき</sup>(午月) という月支に対してです。

宿命(5) **㊸㊹** 午月の日干 <sup>きすい</sup>「癸水」は『死』5番目の強さです。  
あくまでも、(午月) という月支を基準にして、「癸水」は『死』5番目です。

そういう意味を論じています。

☞ (月支) はどういう場所なのか **かけい ぼしよ** 家系の場所 です。

宿命(5) **死㊸㊹** の人物の家系において、「癸水」は『死』になります。

実際の占いでは、その人物の **月支(家系)** において、日干「癸水」は『死』です。

と、いうことを論じているわけです。

**宿命（5）死①②** でいえば、それはあくまでも月支（<sup>うまづき</sup>午月）という基準において〔<sup>へいか</sup>丙火は強い〕です。という意味になります。それゆえ「旺相休囚死法」は、あくまでも、家系のなかのチカラ関係を論じる技法です。

この力関係というのは「実際の占いにおいて、権力とか、発言権のようなもの」そのように考えておかれるとよいでしょう。

旺相休囚死法はあくまでも家系のなかの力関係を論じる技法。



権力・発言権

「旺相休囚死法」は、家系のなかにおけるチカラ関係を論じるものです。

言い換えれば、家系の外（<sup>そと</sup>そと）におけるチカラ関係（<sup>み</sup>み）を観ることはできません。

〔たとえば〕「旺相休囚死法」で、この人は『死』になりました。ということは、その人物はあくまでも、月支（家系）において『死』になりますから、「1 番弱いですね」という意味になるのであって、家の外においては、強い人かも知れないのです。そういう人物の宿命もあります。

「たとえば」家系（家）のなかでは、小さくなっているお父さんが、会社に行けば威張っているのかも知れないですよ。

会社で威張っている重役さんが家に帰ると、奥さんに、頭が上がらないとか、子供の言いなりになってしまうとか、そういうことは実際にあります。

社会では偉い<sup>えら</sup>のに、家に帰ると親のいいなりになっているとか、そういうこともあるでしょう。

「旺相休囚死法」は **月支（家系）を基準** にしています。あくまでも“家系のなかでのチカラ関係”を論じるものです。

ということは、その人物はもともと性格的にすごく気が強い人物かも知れないのです。

その人物は、世の中・社会の場では、すごい気の強さを発揮しているということもあるのです。

「でも…彼<sup>かれ</sup>って、家のなかではおとなしいですよ」と、「えっ、それっ、本当ですか……信じられないわ？」

このようなことは多々あります。

家のなかでのチカラ関係を知るのが旺相休囚死法です。

☞ そして、ここで注意しておかなければいけないのは、  
〔運勢がよい〕〔運勢が悪い〕 それとは別のことです。

『旺』になっているから〔家のなかで権力が強い〕から  
とって、その人の運勢も強いとは決まっていません。  
逆に〔家のなかでは小さくなっている〕からとって、  
〔運勢がよくない・運勢が悪い〕とは決まっていません。

家のなかでは、おとなしいけど、運勢はすごく強い。  
そういう宿命の人物もおられるのです。

運勢が〔よい〕〔悪い〕とは、まったく別のことである。

ということも、頭に入れておいてください。

〔たとえば〕自分の宿命みたら『死』になっても、  
（1番弱い。ああダメだ……）とおもわないでください。

「旺相休囚死法」は運勢が（よい）（悪い）とは関係ない  
のです。

運勢とはまったく別のことです。

☞ 具体的に「旺相休囚死法」を用いた観方を練習します。 ➡

## 第 2 章 「天皇家」

「昭和天皇」 第 124 代天皇 （昭和時代の天皇）

1901(明 34)-4-29 ～ 1989(昭 64)-1-7

ご称号「迪宮 みちのみや」 お名前・幼名「裕仁 ひろひと」

「香淳皇后 こうじゅんこうごう」 お名前「良子女王 ながこによおう」

1903(明 36)-3-6 ～ 2000(平 12)-6-16

(平成時代の天皇)

「上皇明仁 じょうこうあきひと」 第 125 代天皇

1933(昭 8)年 12 月 23 日 2019(平 31)年 4 月 30 日退位

ご称号「継宮 つぐのみや」 お名前・幼名「明仁 あきひと」

「上皇后 じょうこうごう」 お名前「美智子<sup>みちこ</sup>」

1933(昭 9)年 10 月 20 日

(令和時代の天皇)

「今上天皇 きんじょうてんのう」 第 126 代天皇

ご称号「浩宮 ひろのみや」 お名前・幼名「徳仁 なるひと」

「皇后 こうごう」 お名前「雅子<sup>まさこ</sup>」

1963(昭 38)年 12 月 9 日

＊ <sup>きんじょうてんのう</sup> 今上天皇〔浩宮様〕 1960(s35)2-23 (令和の天皇)

天皇家・宿命（1）今上天皇

	辛	戊	庚		} 二十八元
申	巳	寅	子		
酉	戊	戊			
	庚	丙			
	丙	甲	癸		

♪年干支から声にだして読んでください

宿命をだしたときに、庚金は金性、子水は水性、とかすぐわかるようになりましたか？

これから先、占うときに「十干」と（十二支）の五行は必ず必要になります。

まだ覚えられていない方は、ぜひ覚えておいてください。

☞ 宿命をだしたときに、五行に置き換えるとよいでしょう。

天皇家・宿命（2）今上天皇 今上天皇の宿命を五行で書きました。

今上天皇の日干は「辛金」です。

辛	戊	庚	金	土	金
巳	寅	子	火	木	水

☞ 人物の場所はおぼえましたか。

陰占・人物の場所

父親の場所	人物は子供の場所	自分の場所
年干	月干	日干
年支	月支	日支
母親の場所	家系の場所	配偶者の場所

占うときに必ず必要です。

☞ きんじょうてんのう 今上天皇 ひろのみやなるひと (浩宮徳仁様) の宿命にもどります。

20頁の参考資料【旺相休囚死法】で「旺相休囚死」をだします。

宿命の月支は寅木 (とらぼく) です。

「表」をみると、1番上の行の左に 月支 季節 と書いてあります。そのすぐ右側に 寅 卯 と書いてあります。

そのかしよ箇所を見ればよいのです。

表を見ると、月支が寅 卯の人は 旺 木性と書いてあります。

宿命には月支のほかに木性ないです。木性がないということは、

今上天皇の宿命のなかには『旺』になる人物はいない。ということになります。

『旺』になる人物がいなければいけない。という決まりはありません。

『旺』になる人物がない宿命もあります。

『旺』になる人が何人もいる。そういう宿命もあります。それが宿命の個性です。

☞ 令和天皇の宿命に『旺』はありません。

2番目に強い『相』は火性です。

その火性が『相』になっています。

宿命全体をみると、(巳)が配偶者の場所にあります。

この(巳<sup>み</sup>火<sup>び</sup>)が『相』になります。

宿命に『旺』がありませんから、この宿命のなかで、

1番強いのは『相』です。

【旺相休囚死法】の表を見ると、木性のつぎは水性です。

水性は『休』になります。

年支に(子水)という水性が1個だけありまして、母親の場所が『休』です。

つぎに『囚』は土性です。

ぼど  
戊土という土性が、月干に1個だけあります。

この戊土が『囚』です。

最後の『死』は金性になります。

令和天皇の日干は「辛金」です。

年干は「庚金」です。

日干も年干も『死』になります。

このようにして「旺相休囚死」が割り振られます。

旺相休囚死に慣れていない場合は、数字で番号つけるとよいとおもいます。

そのほうがわかりやすいでしょう。 ➡

きんじょうてんのう ひろのみやなるひと  
今上天皇（浩宮徳仁様） 宿命に番号をつけました。

①旺 ②相 ③休 ④囚 ⑤死

天皇家・宿命（3）今上天皇

⑤	④	⑤
辛	戊	庚
巳	寅	子
②		③

この宿命を「旺相休囚死法」で占いますと、  
今上天皇ご自身は5番の『死』です。

『死』になっていますから1番弱いのです。

旺相休囚死法はあくまでも家系のなかの力関係を論じる技法。



権力・発言権

今上天皇は天皇家ご一家のなかでは、権力とか、発言権  
が弱い人です。ということになります。

一家のなかで権力とか発言権が弱い人だということと、  
“運勢も弱い” それとはまったく別です。

「旺相休囚死法」で『死』になっているからといって、  
悪い宿命とか運勢が弱いということではありません。

「一家の内<sup>うち</sup>での発言権が弱い人物」ということですから  
『我俣<sup>わがまま</sup>をいわない人物』です。ともいえるわけです。  
自分の希望よりも、ほかの人の希望を優先してあげる人  
です。ともいえます。

『旺』になるのが〔よい〕とは決まっていません。

『旺』になるのが〔悪い〕とも決まっていません。

『旺』で自分が1番という人物は、一家のなかでは権力  
が強いといえますが、我俣<sup>わがまま</sup>が強いただけかも知れません。

それゆえ、5番の『死』になるのは〔よくない〕〔悪い〕  
とは決まっていません。

こういう人物は自分の意見をあまり強く出しませんけど、ほかの  
人の意見を優先させてあげるようにもなります。

そのようにもいえるわけです。

☞ 「今上天皇」の<sup>きんじょうてんのう</sup>子供時代（<sup>ひろのみやなるひと</sup>浩宮徳仁様）を考えます。配偶者が『相』ですから、この方の宿命で1番強いのは<sup>みび</sup>（巳火）の火性です。日支は配偶者の場所（妻の場所）です。

配偶者が『相』ですから、<sup>まさこさま</sup>雅子様が『相』になります。子供時代に妻はいませんから〔子供時代を考えるとときには、日支の配偶者の場所は除いて〕考えます。

配偶者を除いて考えますと、今上天皇の宿命において、家族のなかで1番強いのは、3番の『休』です。

<sup>ねすい</sup>子水が3番で、子水は年支（母親の場所）にありますから、母親になります。

結婚前、つまり雅様様が妻になる前は、母親が1番強いわけです。ということは、子供時代は、母親の言うことはよく聞き分ける子供でした。

というふうにご占えます。

自分が5番の『死』です。母親は3番の『休』です。

こういう子供は、母親の意見には<sup>さか</sup>逆らえないともいえま  
すし、よくいえば、母親の意見を素直に聞くよい子で  
した。そのようになります。皆様はいかがおもいますか……？

年干（父親の場所）の「庚金」は5番の『死』です。

父親（継宮秋仁<sup>つぐのみやあきひと</sup>／平成の天皇）も『死』になっています。  
皇太子・浩宮様ご自身も強く意見をだしません、父親も自分とおなじ5番の『死』ですから同等といえます。  
それゆえ、父親の意見をそれほど重要視していない子供でした。そのような子供だったと占えます。

母親（美智子様）のいうことはよく聞くけど、父親の意見に対してどうなのかといえれば……悪くいえば軽視している（チョット軽んじている）。そういう人といえます。

☞ 天皇家も人間の集団です。

〔たとえばの話として〕つぎのような事象も起こり得るわけです。

子供の頃に、父親から「こういう手順でやっておきなさい」といわれたら、母親に相談するわけです。

母親にいちいち「お父さん〇〇……とっているけど、そうやっていいの……？」と、母親の許可を得てから、父親にいわれた事をやり始める。というようにです。

参考：重要視（重要と認めること）

〔たとえば〕普通の家であれば、子供がおもちゃ買って欲しいと思うとき、欲しい物はお父さんにいわないで、お母さんに頼むわけです。

お母さんあれ買っていい？ お母さんの許可を得てからうごく、そういう子供になっていきます。

宿命にはそう書いてあるわけです。

さて、このように<sup>み</sup>観ておきまして、ご本人が結婚すると日支（配偶者の場所）が埋まります。

日支は妻が座る場所なので〔妻座<sup>さいざ</sup>〕という言い方をします。妻座には雅子様（配偶者）が座ります。

誰でもそうです。結婚すると、自分の日支の場所には配偶者が座ります。

さきほど……結婚前・雅様が妻になる前は、母親が1番強いです。と、書きましたが、結婚して妻になった雅様は（日支）に座ります。

皇太子・浩宮様が結婚する前は〔空席だった場所〕に、人物（妻になった雅様）が座ります。

結婚した途端に、2番目に強い『相』が妻座に座りました。

ご自分は5番の『死』で、妻の雅子様2番の『相』です

から、妻の意見を重要視じゅうようしします。

そういう人になっていきます。

結婚前は母親のいうことをよく聞きわける子であったのが、結婚したら妻のいうことを優先して聞く夫になるわけです。

結婚前は母親でしたが、結婚後は妻を優遇するようになります。

☞ ここは少し難しいのですが、もう少し深く読むときはつぎのように観ます。

結婚前は母親のいうことを、優先して聞く子供であったわけですが、結婚すると母よりも妻の意見を優遇するようになります。

長男がそのように変わってしまったら、お母さんの側から見て、変化した息子をどのように思うでしょう。

一般的に考えて、このお母さんは子供の妻をどうおもいますか、子供を妻に取られてしまったようにおもうのはありませんか。心おだやかではないでしょう。

こういう宿命は、特に〔嫁・姑の問題〕が起こりやすいといえます。

まさこ まも ひろのみやなるひと  
「雅子を護ります」浩宮徳仁様はそういう宿命です。  
結婚した途端に母親よりも、妻のことを聞くようになってしまうのですから、母にしてみれば、気持よいとはいえません。雅子様は（気持ちよい）そのようにおもわないでしょうけど、母親の美智子様にすれば、見ていて気にさわるといえるでしょう。美智子様も人間です。

参考：すれば〔前の事柄が成立したあと、それが原因となって事柄が成立する〕

浩宮様の父親（継宮秋仁様／平成の天皇）は、浩宮様の宿命のなかでは、もともと5番の『死』ですから、どっちがどっちでもいい話です。

浩宮様の宿命の年干「庚金」が父親の場所。そこは⑤になっています。

父親からみれば……うちの息子は、自分の言うことをあまり聞いてくれない、母親のいうことばかり重視している。そのように最初から想っているわけです。

その状態ですから、子供（浩宮様）が妻（雅子様）のことを聞くようになって、父親にとってはあまり関係ないのです。（自分のいうことを聞いてくれない子供だったわけです）

結婚した息子の気持ちは変化したことは、母親にとっては大問題です。一般家庭の次男とかであればまだしも、

この場合は天皇家の跡継ぎです。

嫁が来たとたんに、嫁のいうことばかりを優先するようになってしまったら、子供の母親からすれば、嫁に好感をもてないはずです。

もちろん、マスコミなどで表面には出ないでしょうけど、母親の美智子皇后様としては、満足できない問題です。

浩宮様が雅子様の病気について、「人格を否定するような動きがあった」と、報道関係者に苦言を呈<sup>てい</sup>したことがありました。

美智子様としては〔息子が雅子さんをそれほど大切におもわなくてもいいのに〕つまり世間に対してまで、そのようことを告げなくてもいいのに、そのように考えていたのではともおもえます。

妻の人格なりを否定されるようになると、皇太子様自<sup>みづか</sup>ら報道関係者に苦言をいう事態になるわけです。

それは皇太子様の日支<sup>み</sup>（巳）が2番の『相』だからです。つまり、雅子様が2番の『相』だからです。

浩宮様は5番『死』ですから、ご自分の問題とかであれば、報道関係に文句をいわない人でもあるわけですから、このように「旺相休囚死法」を読んでいけばよいのですが、もう少し難しくなっています。

ひろのみやなるひと

浩宮徳仁様の宿命を「旺相休囚死法」でみてゆきますと、父⑤で母③ですから母親のほうが強くて、母③より妻②のほうがより強い。そう書いてあります。

しかし、実際に妻の宿命とか、母親の宿命をだしたときに、母親の宿命にそのように書いてあるとは限らないのです。

つまり、夫の宿命には「妻が強い」と書いてあっても、妻の宿命をみると「私は弱い」と書いてあるかも知れないのです。

雅子様の宿命をだしてみると、そういうふうにかかれてあるのかも知れないのです。

もしそうだとすれば、どういうことになってしまうのでしょうか。そこが占うときの焦点になる大事な考え方の部分です。

☞ 宿命をならべました。

天皇家・宿命（4）旺相休囚死

(現皇后・雅子様) (現上皇后・美智子様) (現上皇陛下・平成の天皇)  
(継宮秋仁)

1963 (s38) -12-9

1934 (s9) -10-20

1933 (s8) -12-23

雅子様

美智子様

平成の天皇

丙 甲 癸

甲 甲 甲

旺<sup>①</sup>癸 甲 癸

戌 子 卯  
冬

子 戌 戌  
秋

亥 子 酉  
冬

4 2 1  
囚 相 旺

5 5 5  
死 死 死

1 2 1  
旺 相 旺

丙 甲 癸

甲 甲 甲

癸 甲 癸

戌 (子) 卯

子 (戌) 戌

亥 (子) 酉

死 相  
5 2

囚 旺  
4 1

旺 休  
1 3

先ほど皇太子・浩宮様の宿命で、家族関係をみましたが、  
父親（平成天皇／<sup>つぐのみやあきひと</sup>継宮秋仁）は5番『死』になっていました。

皆さんが《<sup>とまど</sup>戸惑いやすい》のは、この部分ではないかとおもいます。つまり浩宮様の宿命で父親は5番です。ところが父親ご自身（平成天皇）の宿命では『旺1番』です。

そのように書いてあるわけです。 日干「癸」⇒ 旺①

浩宮様の宿命の内では、父親は5番のはずなのに、父親の宿命をだして見たら〔父親自身が1番〕になっています。

これっておかしいじゃない、どのようにみたらよいのか……？

そのようになりやすいかと思いますが、これは少しもおかしくないのです。

このようになっていることが当たり前なのです。

☞ そこで順番に説明していきます。

まず、父親（継宮秋仁／平成の天皇）の宿命から考えます。

浩宮様の子供時代とおなじように、父親の子供時代を考えますと、この方は自分が1番です。

自分が1番だから、一家のなかでは強い子供です。

子供の場合（一家のなかで強い子供）というのは、どう

しても、我侘わがままな子供になりやすいのです。

特に長男に生まれたりすると、よけいに自分が1番だと思ってしまうわけですね。

継宮秋仁様の宿命には、そのように書いてあります。

当然、我侘わがままな子供になります。

しかも、継宮明仁様は昭和天皇の嫡子ちやくし（跡継ぎ）です。

つぐのみやさま けいし ほうぎよ のち  
継宮様は昭和天皇の継嗣です。昭和天皇崩御の後に天皇陛下になりました。〔平成の天皇〕であり〔現・上皇陛下〕です。

つぐのみやさま じょうこうへいか ひろのみやさま きんじょうてんのう  
継宮様（現・上皇陛下）の長男が浩宮様（現・今上天皇）です。

継宮様の子供時代は、母親（香淳皇后・良子様）は3番になっています。母親のいうことはあまり重要視しません。

こうじゅんこうごう ながこさま  
（香淳皇后・良子様は昭和天皇の妻）

しかし、父親の昭和天皇（迪宮裕仁様）は1番です。

子供時代の継宮様が我侘な子供だったとしても、父親の昭和天皇に対しては敬う気持ちをあらわしていたのです。そういう子供だったのでしょう。と占えます。

そして、つぐのみやあきひと しょうだみちこ  
継宮秋仁様は正田美智子様と結婚しました。

妻となった美智子様は日干「甲木」月支は（戌）の宿命でした。

そうしますと、美智子様の日支（夫の座る場所）は4番『囚』と書いてあります。

つぐのみや  
継宮秋人様ご自身は、もともと〔自分が1番〕だという宿命なのに、妻の宿命のなかでは〔夫は4番〕です。

このように書いてあるわけです。

「これっておかしい……」とおもうかも知れませんが、これはおかしくないのです。

それは、つぎのように考えます。

美智子様と結婚すると、継宮様つぐのみや（平成の天皇）は運勢のうえで美智様の日支（夫の場所）に座すわらされることになるのです。

自分の宿命では『旺』1番であっても、美智様のような宿命をもつ女性を妻として迎えました。

美智様の夫になったのですから、美智様の宿命のなかにある日支（夫の場所）に、運勢の上で座らされることになるのです。

そうしますと、もともと1番の『旺』で、少し我侷わがままな子供だったのですが、結婚したら4番『囚』の椅子に座られますから、美智様と結婚したことで、継宮様の力ちからが弱くなったのです。

継宮様ご自身の宿命は、もともと1番の『旺』ですけど、結婚したら4番の場所に座られます。

結婚前は1番であったのが、4番に座らされることにな

りますから…… 1 番と 4 番の中間ぐらいの 2 番か 3 番位、  
そのぐらいの強さになってしまいます。

このように考えます。

旺① 相② 休③ 囚④ 死⑤

天皇家・宿命（5）旺相休囚死

1933 (s8) -12-23

1934 (s9) -10-20

つぐのみやさま  
継宮様 [平成の天皇]

みちこさま  
美智子様 [平成の皇后]

癸 甲 癸

甲 甲 甲

亥 子 酉

子 戌 戌

水 木 水

木 木 木

水 水 金

水 土 土

① ② ①

⑤ ⑤ ⑤

① 冬 3

4 秋 ①

1960 (s35) -2-23

1963 (s38) -12-9

ひろのみやさま  
皇太子・浩宮様

まさこさま  
雅子様

辛 戊 庚

丙 甲 癸

巳 寅 子

戌 子 卯

金 土 金

火 木 水

火 木 水

土 水 木

⑤ ④ ⑤

④ ② ①

② 春 ③

⑤ 冬 ②

父の場所

長男で嫡子・浩宮様ちやくし ひろのみやさまが生まれましたから、継宮明仁様つぐのみやあきひとさまは父親になりました。浩宮様の宿命の年干(父親の場所)に庚金がある。浩宮様の宿命をみると、父親の場所は ⑤『囚』と書いてあります。[68頁を参照ください]

父親の平成天皇(継宮様)に子供が生まれると、その子供(浩宮様)の「年干(父の場所)」に平成天皇は座すわらせられることとなります。

皇太子(浩宮様)は5番『死』と書いてあります。

長男が生まれたので、父親は余計に弱くなってしまったわけです。

もともと1番『旺』だった平成天皇(継宮様)が美智子様と結婚したために、4番『囚』の椅子に座すわらされてしまいますから、チカラが弱くなってしまい、家のなかでの発言権も弱まってしまいます。

さらに浩宮様のような子供が生まれると、浩宮様の宿命にある年干(父親の場所)に座すわらされることになってしまいます。そこは5番になっています。

浩宮様が生まれてからはなお弱くなってしまったのです。

どなたでも、誰と結婚するのか、どんな子供が生まれるかによって、一家のなかにおける自分の<sup>ちから</sup>力が、本来よりも〔強くなったり〕〔弱くなったり〕するわけです。

<sup>つぐのみや</sup>継宮様（平成天皇）とおなじ生年月日の人物でも、どういう宿命の女性と結婚したのかによって、家庭内のチカラ関係はさまざまな姿になります。

美智子様のような宿命の女性を妻として迎えると、夫になる男性は4番『囚』の椅子に座ることになりますからチョット弱くなってしまうのです。

それに加えて、浩宮様のような宿命の子供が生まれると、5番の『死』の椅子に座ることになってしまうために、もっと弱くなってしまうわけです。

多分——継宮様ご自身は、子供の頃は我俣に育ったのに、結婚してからは「言いたいことも控えて、我慢するようになってきて、子供が生まれて、なお我慢しなくてはいけない」ということになってしまったわけです。

このようは人生の変化を送って来られたと想われます。

☞ 結婚して、子供が何人生まれるのかわかりませんが、子供のなかで長男は親の後を継ぐ子供だと思います。

跡継ぎの子の宿命が一番強く親に作用します。

お子さんがいらっしゃる方は、子供が何人いても、跡継ぎの子供に焦点を当てて、私が母親だからどうだとか、夫は父親の場所に座らされると強くなるとか、弱くなるとかというのを、長男の宿命で観るとよいのです。

(親の跡を継がなくても、長男の宿命で観るとよいです)

☞ 美智子様つぐのみやあきひと(継宮明仁様の妻)の宿命をみていきます。

美智子様自身の宿命では、自分が5番『囚』で大変弱いのです。子供時代は我侷をいわない子供です。

自分の意見は強く出さない。それでは誰の意見を1番聞くのか……母が1番になっています。当然母親です。

彼女は結婚するまで、ご自分の結婚に関しても、母親のいうとおりに生きて来たと思えます。

そしてつぐのみやさま継宮様と結婚しましたので、継宮様の宿命の日支(妻の場所)に座らされることになりました。

夫の宿命の日支さいざ(妻座)に座ります。

その妻座は継宮様の宿命の内で1番の『旺』です。

その妻座は継宮様の宿命の内で1番『旺』です。  
美智子様はご自身の宿命のなかでは、5番『死』で最弱であったのですが、結婚した途端に『旺』の場所に座らされることになったわけです。

美智子様は結婚してから強くなりました。

昭和天皇の皇太子・継宮様の妻になりましたから、いやでも強くならざるを得なかったわけです。

美智子様は最弱の⑤から、結婚していきなり、最強の①の場所に座りました。

そして長男の浩宮様が生まれたら、浩宮様の宿命の内では、母親の場所に座らされます。3番『休』です。  
浩宮様にお嫁さんが来るまでは3番ですから、天皇家のなかでは1番強いです。

そうしますと、つぎのようにいえます。

独身時代の継宮様は『旺』でした。

独身時代の美智子様は『死』でした。

それが昭和天皇の嫡子・継宮様と結婚したことによって、1番の場所に座らされて強くなり、長男が生まれてから、さらに強くなりました。といえます。

「旺相休囚死法」は〔強ければよい〕というものではありません。

運勢の強さとは別ですよ。と先ほども書きましたけど、

「旺相休囚死法」で〔強い〕  
「旺相休囚死法」で〔弱い〕

} 運勢の強弱ではない

「旺相休囚死」の強弱は……運勢を具現ぐげんしていません。

参考：具現（はっきり具体的に現れること。実際となって現れること。）

⇒ 美智子様はもともと5番『死』でした。その人が結婚して、いきなり1番の場所に座ることになりました。

その立場になると、彼女はどのように感じるのでしょうか。

もともと、実家じっか（正田家）なかでは、母親のいうことをよく聞いて、母親のいうとおりに生きてきた女性です。

〔旺相休囚死にはそのように書いてあります〕

結婚する前は母親のいうとおりに物事をやっていけばよかったのですが、結婚したらいきなり1番の場所に座られました。そうなる、ご自分の意見を明確に出さなくてははいけなくなります。

1番『旺』の座ざは、一家のなかで“強くしっかりしなくてははいけない”そのような場所です。

もともと最弱の女性が、結婚した途端に最強の場所に座ざしたということは、相当な負担がかかるようになります。大変なストレスです。しかも天皇家です。

もともと弱い人が強い場所に座る



負担

もともと弱い人が強い場所に座ると、かなりの負担になります。

その反対に、もともと最強の人が、最弱の場所に座らされてしまうと、どうなるでしょう。

もともと強い人が弱い場所に座る



不満

不満になります。

⇒ 美智子様と結婚する前の皇太子・継宮明仁様は、もともとは『旺』です。

1番なのに結婚したら4番の場所に座られました。

結婚前は自分の発言権を強く出していた人物であったのに「結婚後は自分を出してはいけない」といわれるようなものです。当然不満になります。

継宮様は結婚してから、自分の意見を強く出せなくなり、不満が多かったとおもえます。

もともと5番だった美智様様が、結婚して1番の場所に座られました。この状況はすごく負担になります。

皇太子殿下の妻になった途端に『旺』です。

これは座っているだけで精神的に負担になります。

本来の美智子様はおとなしい、<sup>ひか</sup>控えめな環境を好まれる人物でしたが、皇太子妃の座についての途端にまわりから頼りにされます。

<sup>みずか</sup>自ら強く周囲の人間を引っ張って行かなければならない。

そういう立場に<sup>すわ</sup>座らされて、非常に負担が多くなったと想えます。

♡ <sup>まさこさま</sup> 雅子様はどうでしょう。

もともと雅子様は4番『囚』<sup>しゅう</sup>です。弱いです。

ご実家のなかでは、父が1番で、母が2番と書いてありますから、雅子様も子供時代は両親の意見を重視して、生きてきたといえるでしょう。父親は外交官です。

雅子様も外交官になりたくて外務省に入ったわけです。

雅子様の「旺相休囚死」(68頁)は、4番『囚』ですから、一家のなかで1番弱いです。

彼女の日支(配偶者の場所)は、5番の『死』になっていますが、日支は結婚するまでは空席で誰も座っていません。

<sup>こうたいし ひろのみや</sup> 皇太子・浩宮様が雅子様と結婚すると、浩宮様は雅子様日支(配偶者の場所)に座ることになります。

つまり、浩宮様は5番の場所に座ることになります。

雅子様は、結婚したことで、浩宮様の宿命のなかでは、妻が1番と書かれている配偶者の場所に座ります。

皇太子の宿命のなかで、日支の(巳火)<sup>みび</sup>は、2番の『相』ですが、皇太子の宿命のなかでは1番強いわけです。

その場所に雅子様<sup>ざ</sup>が座しますから、皇太子の宿命のなか

で1番強くなります。それが妻となった雅子様の姿です。彼女は結婚するまでは、一家で1番弱かったわけですが、結婚したら、天皇家で1番強い場所に座られました。これも相当な負担になります。大変に体調が悪い時期がありました。精神的に落ち込んだ原因の1つは背負った負担の大きさだといえるでしょう。

美智子皇后様も結婚後、何年かした<sup>あた</sup>辺りで、相当に体調がおもわしくなく、精神的に落ち込んでいるような姿の時期ありました。ちょうど、それとおなじようなことを、雅子様も経験したわけです。

⇨ 皇太子<sup>ひろのみや</sup>浩宮様はもともと5番の『死』です。雅子様と結婚したら、夫の場所はおなじく5番です。この姿は相変わらず弱いままなのですが、もともと5番『死』の人が、5番の場所に座るのはむしろ気が楽です。いままで通りでよいわけです。浩宮様は雅子様と結婚して楽です。むしろ強い妻が来てくれたとおもって、妻を頼るようにもなります。しかし、頼りにされた雅子様としては、もともと4番で

弱かったわけです。それなのに強い場所に座らされていますから負担です。それに加えて天皇家の嫡子ちやくし たよに頼られたら、かなりの義務と責任を身に負ってしまいます。このように占っていくわけです。参考：嫡子（家督を継ぐもの）

どなたでも、まわりの人達の影響を受けます。

つまり、どのような親元で育ったのか、そして結婚したり、子供が生まれたり、これらの事象によって“チカラ”が強くなったり、弱くなったりするのです。

ご自分あるいはお知り合いのご家族の宿命で「旺相休囚死法」の観方を練習なさってください。

「旺相休囚死」の力関係はあくまでも宿命内の話です。

〔たとえば〕山田さんの家族内の強弱を比べることはできます。おなじく、大竹さんの家族内の強弱を比べることもできます。しかし、山田さんと大竹さんの家族を対比させて、強弱を比べることはできません。

④女性と⑤男性が結婚すると、相手の宿命の配偶者の場所にそれぞれが座られます。子供が生まれれば家族ですから、家族内における力の関係を「旺相休囚死法」をつかって観ることができます。

☞ 参考——。

美智子様が、当時の皇太子・継宮明仁様つぐのみやあきひととの結婚を決めたのは美智子様の母親の意見です。という言い方ができます。母親の意志によって決めたと考えられます。

母がダントツに強いです。母親が中心の家だと美智子様が想っていたということです。

美智子様にとって、正田家で一番強いのは母親です。

☞ 長男、次男、三男、あるいは長女、次女、三女と生まれてくれば、その時々で、チカラ関係が変わって来るのが読めるわけですが、家系おさの話だけで納める場合には、長男を主として考えてください。

あるいは、跡継ぎを主役としてください。

このように家族の姿というのは、お互いに影響し合います。

宿命には、親の場所とか、配偶者の場所とか、その場所が決まっていますから、そこに座る人達との関係で観ていきます。

＊ あいこないしんのう  
愛子内親王

2001(平13)-12-1

天皇家・宿命(6) 旺相休囚死

戊	己	辛	愛子様は父親の場所が3番です。
戊	亥	巳	
	冬		
土	土	金	
土	水	火	
<b>5</b>	<b>5</b>	<b>3</b>	
死	死	休	
戊	己	辛	
戊	(亥)	巳	
死		囚	
<b>5</b>		<b>4</b>	

愛子様の宿命をみますと、父親の浩宮様が強くなりました。いままで浩宮様は5番です。結婚して雅子様の夫になっても5番だったわけです。家のなかで自分の意見は出さないし、通らないと思っていた人物ですが、愛子様が生まれて、その宿命のなかでやっと3番です。

愛子様が生まれてから、お元気になられたのではありませんか。強くなられたのではありませんか。

☞ 愛子様の夫の場所（日支）は、5 番『死』ですから、ここに座る人物は相当に大変だと想えます。<sup>おも</sup>  
民間から来るしかないのでしょうけど、あらかじめ5 番の椅子が用意されています。  
愛子様も5 番ですが、愛子様は元々天皇家の人間ですから、天皇のご息女が妻ということは、普通に考えても、夫は小さくなりそうです。

「旺相休囚死法」雅子様と浩宮様と愛子様の関係だけを考えますと、雅子様自身の宿命そして浩宮様自身の宿命のなかでは子供のほうが強いです。

雅子様の宿命のなかで、ご自身は4 番『囚』、愛子様は2 番『相』<sup>そう</sup>です。（参照 68 ページ）

浩宮様の宿命のなかで、ご自身は5 番『死』、愛子様は4 番『囚』<sup>しゅう</sup>です。（参照 68 ページ）

この順位の姿は子供が生まれると、夫婦ともに子供を大事にします。悪く出ると子供に振りまわされます。

そういうご夫婦といえます。ご自分よりも子供が強いわけですから、子供を大事にするか、それとも子供に振り回される状況になりやすいのです。

この状況は通常——子供が大きくなればなるほど、振りまわされる度合が大きくなります。

この事象は一般家庭の場合でも考え方はおなじです。

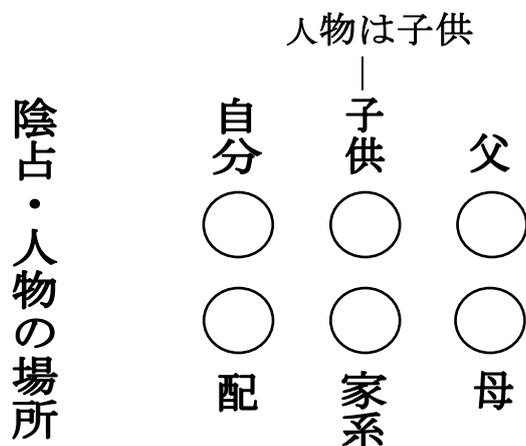
〔たとえば〕<sup>つぐのみや</sup> 継宮様（平成の天皇）は、自分より子供のほうが少し弱いです。

ご自身『①旺』 子供『②相』 ⇒ 参照 天皇家・宿命（5）旺相休囚死

〔たとえば〕美智子様（平成の皇后様）は自分と子供がおなじです。お二人とも〔子供のほうが強い〕わけではありませんから、子供に振りまわされないのです。

親子関係はこのように観ていきます。

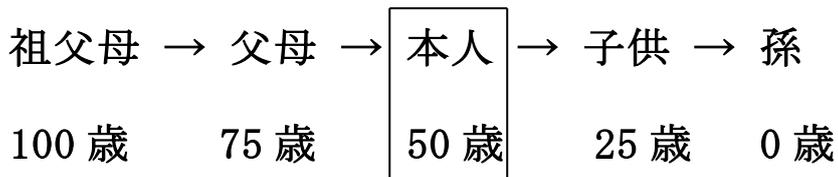
「陰占の人物の配置」については、51 ページを参照ください。



### 第3章 家系と旺相休囚死法

【旺相休囚死法】を「家系」に当て嵌める考え方があります。

#### 宿命（1）家系



宿命（1）家系 その流れを、祖父母から孫まで —— 年齢は

〔25 歳〕 違いで書きました。 年齢は仮にです

いま 現在・本人〔50 歳〕という人がいるとします。

祖父母は〔100 歳〕生きているのかどうかは不明ですが、生存していると仮定して考えます。

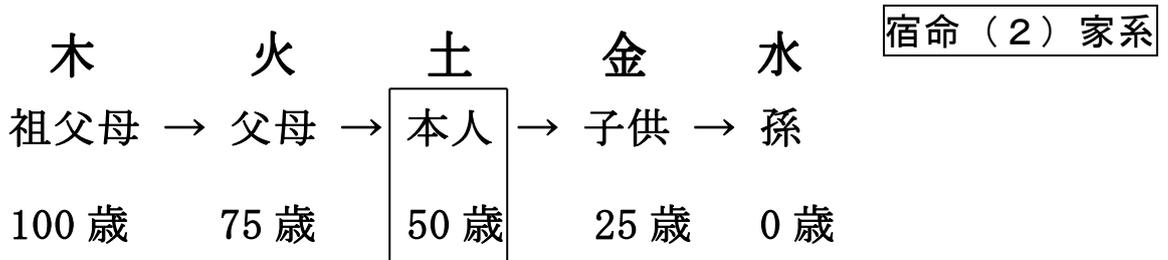
子供は〔25 歳〕で、さらに孫がいて、その孫は生まれたばかりの〔0 歳〕です。

このような「五代」にわたる一家があったとします。

算命学では、家系の流れを占う技法がいくつかあります。

その場合、その「家系」にとって、一代目の人、二代目の人、三代目の人、というように当て嵌めます。

ときには **宿命（2）家系** のように、五行（木火土金水）の順番に当て嵌めて物事を考えていきます。



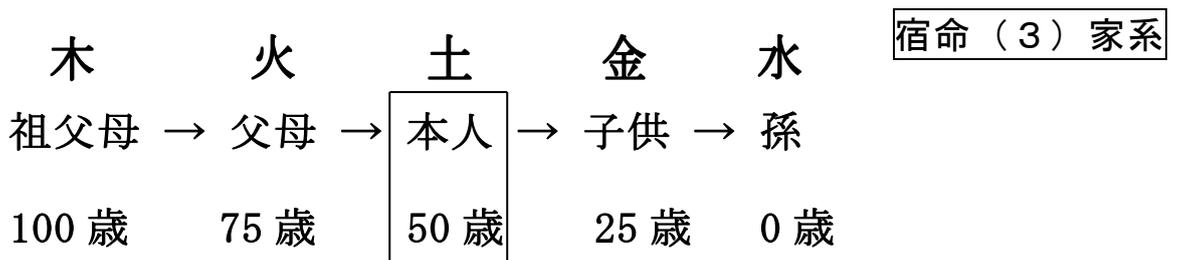
祖父母（木性） 親（火性） 本人（土性） 子供（金性） 孫（水性）

**宿命（3）家系** の親子五代にわたる家系があるとするれば、このなかで現在、一家の大黒柱と呼べる代は、どの代なのといえ、年齢から考えて、通常は **本人** です。

親は〔75 歳〕ですから、すでに引退しています。

子供は〔25 歳〕なので、まだ若いです。

一家のなかで、大黒柱といえる一家の中心的存在といえるのは **50 代の本人** です。本人が『旺』になります。



旺①

いま、一家の大黒柱といえるのは、**50代の本人**の代で、「旺相休囚死法」でいえば、1番強い『旺』です。

**宿命(3)家系**についてはこのように考えます。

ただし、このことは、本人自身の宿命が『旺』なのか、『旺』ではないのか……それはわかりません。

そのことは別にして、誰でも、一家の中心的存在になれば、一家を背負って、引っ張っていかなければいけない時代があるわけです。

自分の宿命が家族のなかで弱くても、一家を引っ張って行かなければいけない状況に立たされるはずですよ。

一般論として、誰でも、この年代になれば『旺』のような役割を与えられます。

そのように算命学では考えています。

そうしますと、この場合『旺』として、割り当てた五行は土性です。

**宿命(2)家系**も **宿命(3)家系**も五行は土性になっています。

『旺』として割り当てた五行は土性です。

土性が旺だとしたら、2番目に強いのはどれになるのか  
 といえば金性です。このことは【旺相休囚死法】の「表」  
 を見て確認するとよいでしょう。

五行の土性はここ

金性は2番目

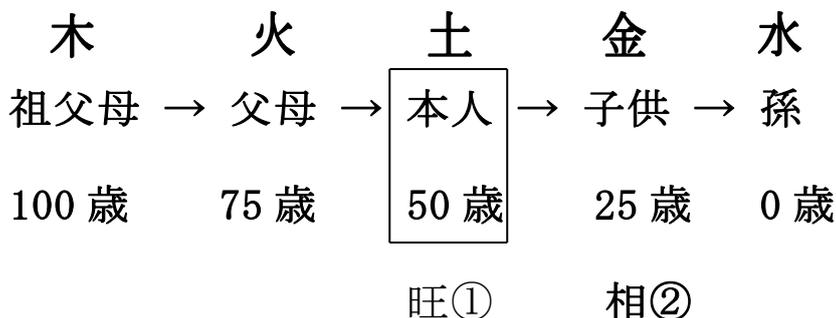
旺相休囚死法 …… 季節の時間と空間の力関係

月支 季節	寅 卯	午 巳	辰 戌 未 丑	申 酉	子 亥
旺 ▲	木性	火性	土性 ▼	金性	水性
相	火性	土性	金性 ▼	水性	木性
休	水性	木性	火性	土性	金性
囚	土性	金性	水性	木性	火性
死	金性	水性	木性	火性	土性

さて、そこで……宿命(4)家系を書きました。

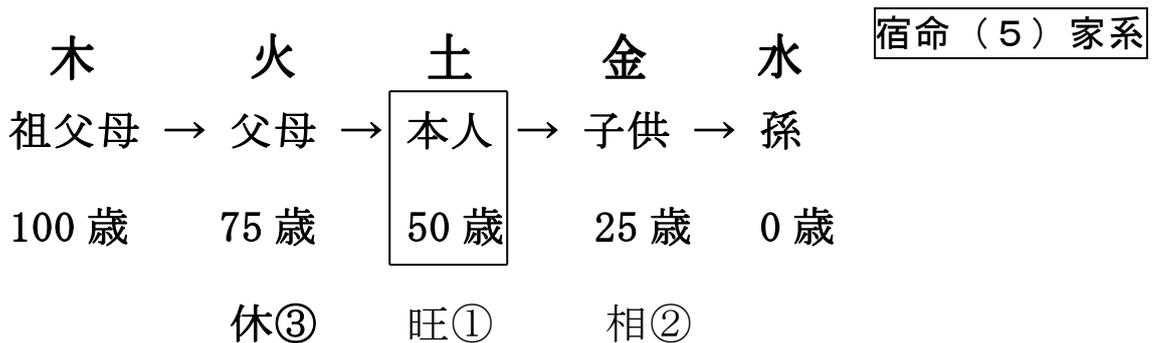
本人は現在〔50 歳〕なので、旺①と想定したのですが、  
 五行で土性が旺だった場合は、自動的に金性が2番目に  
 強い相②になるはずです。

宿命(4)家系



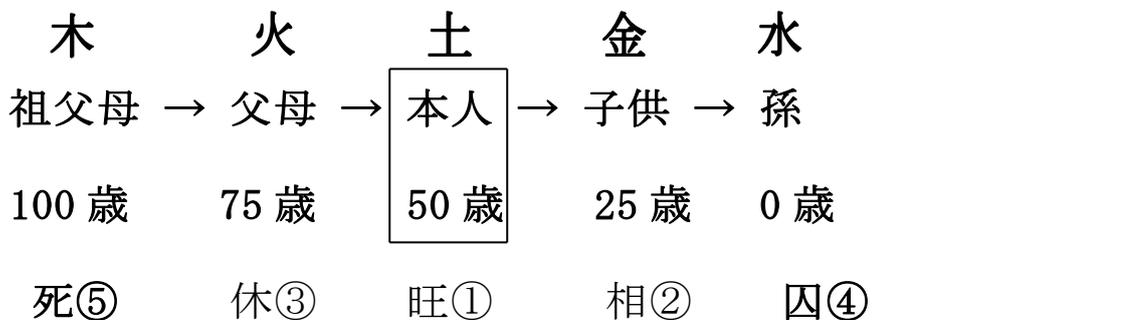
☞ 3番目の『休』は誰になりますか……？ということで  
宿命(5)家系を書きました。

土性が旺の場合には、自動的に火性が休③になっているはずで  
す。



家系の理想型(A) 『囚』は水性です。孫が囚④になります。  
1番弱いのが〔100歳〕の祖父母で死⑤になります。

家系の理想型(A)に記載した順番は、算命学で考える家系のな  
かの理想型です。



家系の理想型(A)

どなたの家でも、**理想型A** のとおりになるとは限りませんが、この順番が最も自然の法則に合った姿です。

こういう力関係で一家が成り立つことが、家系の理想型であり、自然界に最も合致した姿だと考えています。

**理想型A** は目安です。当然個人差はありとおもいます。

<sup>いま</sup>現在——本人が何歳でもよいのです。

<sup>いま</sup>現在——〔60 歳〕で『旺』の時代だという人もおられるでしょう。

年齢が〔50 歳〕でも〔60 歳〕でも、現在の自分は『旺』の時代であり、自分が『旺』であれば、子供は『相』の場所にいなくてはならないのです。

そして〔75 歳〕の親よりも、つぎの代を担う〔25 歳〕の子供のほうが、頼りになる存在にならないといけなわけです。これが理想型だと考えています。

世の中の全ての家系が **理想型A** と同じ型とは決まっていません。

理想型から大きく外れている家系もあるはずで

**理想型①** を見てわかるように、3 番目〔休③〕にしっかりしている人物は本人の親です。

そして、4 番目〔囚④〕が孫になりますと、1 番弱いのが〔100 歳〕の祖父母〔死⑤〕になります。

そういう <sup>ちから</sup>力 関係が一家のなかに出来ていると、その家系は差し障りなく続いて行くことになります。

家系の理想型という意味は、①の姿になっている家系であればしっかりします。

さらに <sup>えんかつ</sup>円滑に続くようになると考えています。

参考：差し障り（都合の悪い事が生じるような事情）

☞ 家系の姿を観るには、人物の宿命をみなくともわかります。

〔たとえば〕三代でも、五代でも、続いている家がある とします。

「あそこの家は、いつまでも歳とった親が、権力を握っていて、いつまでも子供がしっかりしない」という家があるとすれば、その家系の運気はこれから先の将来、下がっていくはず です。と占うことになります。

すべての家がぴたりと **理想型①** とおなじというわけにはいかないでしょうけど、できるだけ①に近い姿がよいのです。

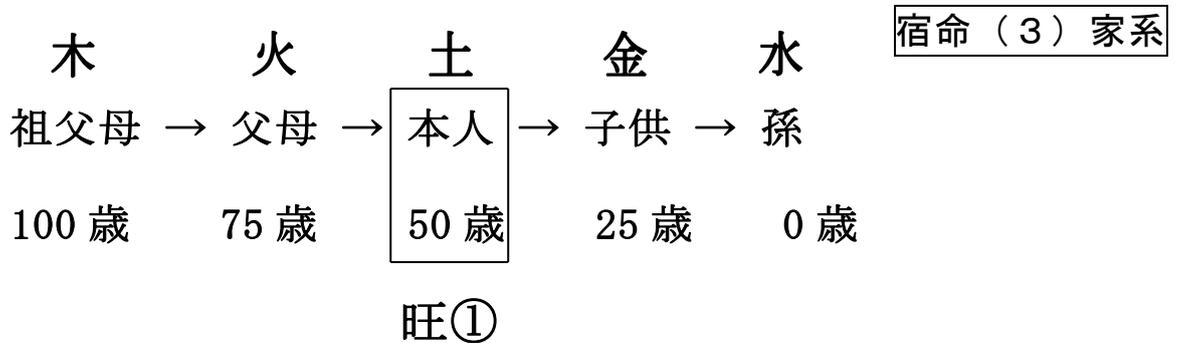
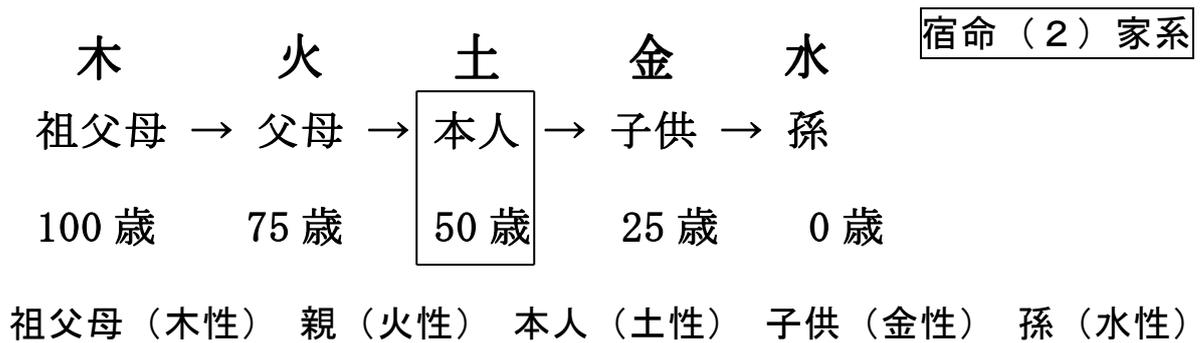
現在の家族構成で、五代も存在している家系はあんまりないとおもいます。

実際はせいぜい三代位まででしょう。

「親子三代で現在一緒に暮らしています」という家系があれば、ここの三代だけを観て、理想型に近いのかどうかを判断すればよいのです。

理想型から外れていれば、外れているほど、家系自体が衰えていくようになります。

🔍 84 頁では **本人 50 歳** の設定として、**宿命 (2) 家系** と **宿命 (3) 家系** を書きました。



つぎの 92 ページに **家系と旺相休囚死法** と書いた「表」があります。

そこに書かれた**Ⓐ**の姿は **宿命 (2) 家系** と **宿命 (3) 家系** とおなじです。

そして、本人 25 年後の姿を**Ⓑ**として書きました ➡

## 家系と旺相休囚死法

①

木	火	土	金	水
祖父母	→ 父母	→ 本人	→ 子供	→ 孫
100歳	75歳	50歳	25歳	0歳
死⑤	休③	旺①	相②	囚④

②

火	土	金	水	木
父母	→ 本人	→ 子供	→ 孫	→ ひ孫
100歳	75歳	50歳	25歳	0歳
死⑤	休③	旺①	相②	囚④

本人 25 年後の姿ということで作りますと、②のように、本人は〔75歳〕になっています。

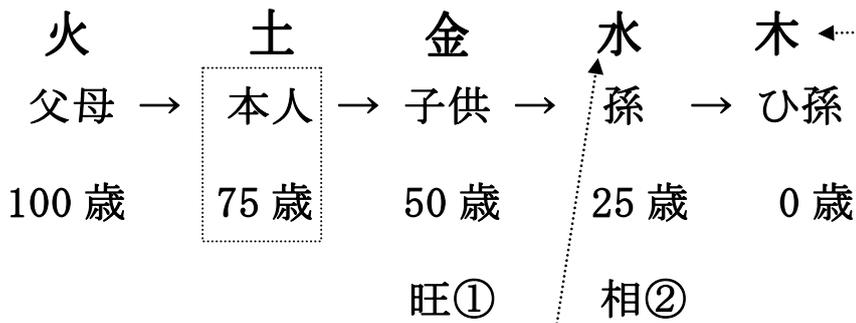
〔25歳〕だった子供が〔50歳〕になっています。

孫は〔25歳〕になっています。親は〔100歳〕です。

ひ孫が生れているかどうかわかりませんが、いるとすれば〔0歳〕になります。25年経過すると年齢が変わります。

五行はおなじですから、本人が土性と先ほど当てはめましたので書きますと、**宿命(7)家系** のようになります。

**宿命(7)家系**



子供が金性、孫は水性、そしてひ孫へと木火土金水の順番に並べて行きますので、水性まできたら、また木性にもどりますから、本人の親は火性です。

この五行の循環は変わりませんが、ただ『旺』になる場所は25年前とは違います。

25年経ちますと『旺』になっている代は〔50歳〕の子供です。子供が一家の中心になっているはずです。今度は子供の金性のところに**旺①**とおきました。

金性を**旺①**とすると、自動的に水性が**相②**となります。そして、土性が**休③**、木性が**囚④**、火性が**死⑤**です。その姿が**㊀**なのです。 ➡

⑧

火	土	金	水	木
父母 →	本人 →	子供 →	孫 →	ひ孫
100 歳	75 歳	50 歳	25 歳	0 歳
死⑤	休③	旺①	相②	囚④

⑧ 家系の理想型

子供が 1 番、孫が 2 番、本人が 3 番に下がります。  
ひ孫が 4 番、親が 5 番です。

金性が『旺』という順番になることを、確かめて頂けるとよいとおもいます。

年代は変わっても、この順番は⑧とまったくおなじ順番になるはずです。

『旺』になる代があるとすれば、『旺』のつぎの代が 2 番『相』にならなくてはいけないのです。

そして、『旺』の 1 つ上の代、つまり親の代は、3 番『休』にならなければいけないのです。

⇒ 25年前は、**本人** が1番『旺』だったわけです。

1番の人が引退したら、2番『相』になるのではなくて、

3番『休』まで下がらなくてはいけないのです。

そうしないと、家系の未来はしっかりしません。

つまり、世代交代です。

1番だった人がいつまでも1番でいたり、いつまでも2番でいたりするために、2番になれるはずの人が2番になれないわけです。

1番だった人が3番まで下がれば、自動的につぎの代は強くなります。

その意味も含めて **家系の理想型** といえます。

このようなチカラ関係が1番自然な姿であり、基本みたいなものです。

この姿を土台にした上で、個人個人の強さ、運勢を加えて考えていくものでもあるのです。

一家のなかで、強さを観ていくのが「旺相休囚死法」の

しゅ主たる観方ですが、運勢を観るうえで、ここでの考え方を応用してつかうようにもなります。

参考：主たる（全体のなかの中心である）

【初年】 39 回目【旺相休囚死法】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 40 回目【十二大従星力学①】です。